

ブラックホール（完結）

At. f

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

短編小説のまとめです

目次

ストロボ・ガール・シンプトム	1
無意識エスケイプ	17
〈二次創作・小咄〉プラネット・ワインド	
アツプ	44
プリムラ・ユートピア	53
〈二次創作・小咄〉アンノウン・デイザイ	
ア	77
アンリミテッド・スカイ	90
インパーフェクション	110

ストロボ・ガール・シンプトム

——一体いつから、私にこんな能力が備わっていたのだろうか？

親友を交通事故で亡くしたあの日から、随分長い間写真を撮らなかったので、分からない。今、手元にある卒業アルバムが、私の写る久々の写真だった。

事の経緯はこうだった。卒業式の後、高校生活で大して仲の良い友達もできなかった私は、居心地の悪い教室から早々に出て、帰宅した。

ただいまの一言も適当に、自室に引き籠ると、教室では終ぞ捲ることのなかったアルバムを開いた。自分がどんな顔をしているかぐらい、見ておきたかった。クラスのペー지를開き、その最初に載っていた集合写真に人差し指で触れつつ、自分がどこにいるかを探す。その途中で、睫毛が目に入ってしまった、思わず瞬きをした。驚いたのはそれからだった。

次に目を開いた時には、私はつい先程までいた高校の、その広々とした校庭に立っていた。自分の身体を見やると、これまた先程まで着ていた制服が身に張り付いていた。

クラスメートだった女子の一人に肩をぼん、と叩かれ、顔を覗き込まれる。何が起こったのか理解できなかった私は、その顔をまじまじと見つめ返してしまった。

「なにボートと立ってるの？写真撮影、始まつちゃうよー？」

「え、あ、うん……」

果たして、彼女の目に私はどう映ったのだろうか。自分ではかなり呆けた顔をしていてと思う。過去の焼き増しのような映像を見せられれば、誰だつて動揺するに決まつているけれど。

見れば、校庭には椅子と台が用意され、写真撮影が今にも始まりそうなどころだった。強力なデジヤヴのように、それでも確かに数ヶ月前の高校に、私は立っているのだ。

色々考えた結果、私の脳は現状を処理することをやめた。これは夢なのだと勝手に理由を付けて、そこから覚めるために頬をぐいと抓ることにした。不思議と意識は、ハッキリしていたから。

心の奥底では分かっていたことだったが、勿論これは夢ではなく、頬を抓ればそれ相應の痛みが私の顔を駆け抜けた。そして、それと同時に視界が暗転し、気が付くと私は自分の部屋へと戻っていた。身体を確認する。着ているのは制服ではなく、部屋着のスウェットだ。

夢じゃない。はつきりとそう確信した。高校から意識が離れたことによつて、私の心はだんだんと冷静さを取り戻していく。

自分の行動を、もう一度振り返ってみよう。そうして、それをトレースするように、繰

り返すのだ。写真に人差し指を当て、瞬きをした。

景色が変わった。私はまた、あの高校へと逆戻りしていた。今度はさつきまで見ていた台の上だ。周りより比較的背の高かった私は、一番後ろの列で写真を撮られていた。これを確認すると、私は頬を抓って自室へと帰還した。

信じられないことが起こっている。これは、もしかして、タイムスリップというものではないのか。そんな能力がいつの間にか備わっていたなんて。これは他の写真でも試してみる価値はある。そう思った私は、一度部屋を出て、一階にある埋め込み型の備え付けの本棚から、小さい頃のアルバムを引っ張ってきた。試しに、小学四年生の宿泊体験学習の時の写真を触ってみる。瞬きをすれば、泊まった宿舎のロビーに座っていた。近くにあった窓の反射で、自分の姿を確認する。子供の時のままだった。つまり今私がしているのは、単純なタイムスリップではなくて、その時間の私になるということだろう。先生から何かを呼びかけられたところで、私は今へと戻ってきた。

どうしたものか、と部屋のベッドに寝転がる。別の写真でも効果が出ているということとは、やっぱり夢ではないんだ、ということを実感した。神様からの贈り物なのか分からないが、今間違いない時間跳躍の能力を手に行っていることは、紛れもない事実なのだ。

「んー、どう使えばいいのかなあ……」

人というものは、自分の手にあまるものを与えられると、それを使いこなすことが出

来ない気がする。ちょうど、走るのが遅い人に与えられた、足が速くなるスニーカーみたいな。走り方が分かっていないのに、そんな靴を与えられても、豚に真珠、猫に小判だ。いきなり時間跳躍なんて使えるようになっても、有用な使い方が分からなかった。

散々考えた挙げ句、他の写真でこの能力にどのようなルールがあるのかを試してみることにした。小さい頃のアルバム、全十編が私の横に積み上がる。いきなり過去に飛ばされるので、走っているシーンや泣いているシーンはダメだ。前者は転びかねないし、後者はいきなり泣き止む不気味な子になってしまう。それは力を試す前から、さっきの高校の一件で分かった。恐らく、あの時の私も台に向かって歩いていたのに、突然止まったものだから、女子に声をかけられたのだろう。

笑顔の写真や記念撮影、学校関連だけだと近場が多いので、家族で行ったイタリア旅行。そういう写真を十枚ほどピックアップして、片っ端からこの力を使ってみることにした。

結果として分かったことは、

・能力発動のトリガーは、自分が写っている写真に人差し指を当て、瞬きをすること。
風景の写真には一切反応しなかった。

・写真を撮った前後の時間へとワープする。毎回決まった時間ではなく、撮る前に飛ぶこともあれば、撮った後に飛ぶこともある。

・一般的な身体ごと移動するタイムスリップではなく（ネコ型ロボットの例が分かりやすいか）、自分の精神だけ憑依するような形らしい。現在に戻ってくると、しっかりと時間が経過しているし、何より過去の私は過去の私のままで。

・過去に飛べる時間の限界は十分間。それ以上過去にいと、強制的に意識が戻される。

・場所、距離についての縛りは恐らくだが、全くない。私はしっかりとイタリアまで飛ぶことができた。

・現在に戻る唯一の手段は、頬を抓ること。叩いてみたり、他の場所を抓ってみたりしたが、なんの効果もなかった。頬なら右でも左でもいい。

……こんなところだ。それ以外は特に制約がなかった。過去では自分の内面が変わっているだけなので、自由に動ける。小学生の時と今ではこんなに視界が変わるのか、と新発見もあった。そうして私の考えも、最初に感じた戸惑いから、この能力をもつと使ってみたいという、一種の好奇心へと変わっていった。

楽しい思い出を、辿っていきこう。これがこの能力の有用な使い方に違いない。春休みに気付けたのは幸運だった。今、私を遮る者は一切いないのだ。

「よし、まずはアレから試そうかな」

小学五年生頃に行った、花畑が綺麗だった公園。今は閉園になってしまったから、も

う一度あの景色を見たかった。何枚か私の写っているものを取り出す。指でなぞって時間を越えれば、綺麗なパンジーの花畑が一面に広がっていた。

本当に、夢みたいな能力だ。景色だけじゃない。空気だって、匂いだって、あの時のままだ。全て、その瞬間が保存されていた。

まだまだ試せるものがある。小学校入学の春に行ったお花見。二年生の海水浴。四年生の温泉旅行。どれもこれも、懐かしいものばかり。そうして、写真の中の世界に魅了された私は、二日を掛けてこの能力にのめり込んでいった。

そうして、中学生のページまで進んだところで、指を止めた。入学したその日の私の隣に写っていたのは、陽郁——こう書いて、ひふみと読む——唯一無二の親友だ。否、だった。彼女は中学二年生の時、交通事故で命を落としたのだ。とても快活な子で、私は色々と振り回されたのを今でも覚えている。彼女と一緒にだった陸上部で、トレーニングこそ厳しいものだったが、充実した日々を送っていた。

それなのに、別れは突然だった。事故の日は雨で、練習のなくなつた私達は、近所のゲームセンターへと来ていた。陽郁が帰らなきやいけない時間だから、と午後四時半を過ぎた辺りで帰って行つたのを覚えている。また明日ね、が最後の会話だった。私は彼女と家が逆方向だった上に、更に少し一人で遊んでいたので事故に気付くわけもなく。私とその事実を知ることになつたのは、食後に見た陸上部のグループLINEの、部長

のぶつきらばうな文面だった。今思えば、彼女も心の余裕がなかったのだろう。

『久後さんがバスに轢かれた。葉月先生と一緒に病院に行ってくる』

皆、その文面は見ているはずなのに、グループには30人以上もいるのに、誰一人として返信をしなかった。私も、返す言葉がなかった。何か文字を打とうとしても、親指が震えるだけ。すぐ母に伝えて近くの病院へと向かったが、部員がどれだけ駆けつけても、陽郁の目が覚めることはなかった。

ムードメーカーを亡くした陸上部は、誰が見ても明白なぐらいに記録が伸び悩んだ。部員が何人も辞めていった。たった一人の人がいなくなるだけで、残酷なぐらいに周囲が変わる。親友がいない世界が、こんなに色褪せたように感じるなんて。何に対してもやる気が起きなくなつて、そうして、私も部活をやめた。退部届けを出した時、顧問の葉月先生は、そう、あなたもやめてしまうのね、と少し寂しそうに言ったが、私が陸上のユニフォームを着ることは、もう一生ないのだ。

そういう経緯もあり、高校受験までその気分を引きずつた私は、目標にしていた学校には受からず、しかも入った第三希望の高校では大した友人も作る事ができなかった。当たり前だ。陽郁以上に、私に気が合う人がいてたまるか。彼女がいないのに、自分だけ楽しい思いをすることへの罪悪感もあった。何度も何度も悔やんだ。あの日、私誘いを断つていけば。もしくは、彼女の家で遊んでいけば。いくらでも事故を回避す

る方法は思いついた。しかし、後悔はいつも先に立つてくれないのだ。どうしようもなく、無力だった。

そこまで考えて、私は指を離した。陽郁のいる写真には、飛べない。会つたらきつと号泣してしまうだろう。何度も謝ってしまうだろう。だから私は、そのページでアルバムを一旦閉じた。

時間も午後七時になり、墨汁を水で薄めたような闇が、私の部屋に漂っていた。階下から、夕飯のいい匂いが届いてくる。時間旅行を繰り返すあまり、現在の時間の感覚が薄れていた。昨日は母親に叩き起こされてしまったから、どうやら過去に飛んでいる間は、ここにいる私の意識は失われるらしい。こういうところにも気を配って運用しなければいけないかもしれない。ぼんやりと考えながら、階段を降りる。体調も写真の中の私の状態に依存するので、今の自分が空腹なのか、はたまた満腹なのかもよく分からなくなっていた。使い過ぎも、きつとよくないのだろう。食卓に繋がる扉を開ける。夕飯は焼き鮭だった。こちらに気付いた母が、私に向かって声をかけてきた。

「今日は起きていたのね、春休みだからって、あんまりだらけちゃダメだから。大学の用意も、しっかりするのよ?」

「はい……分かってるから。昨日は、疲れてただけだつてば」

「分かってるのなら、いいの。さ、出来てるから席についてなさい」

促されて、椅子に座る。父は夜遅くまで働いている事が多く、大抵この時間は母としか家にいなかった。

「いただきます」

「いただきます」

鮭をつつく。食べている時はあまり話さない。おまけに、能力に気付いてからは少しでも長く写真のそばにいたかったので、食べるスピードも速くなってしまっていた。焦るあまり、鮭の身を飛ばしてしまった。咄嗟に、頬を掴ってしまう。飛んだ過去で失敗しそうになった時に、すぐ抓る癖が付いてしまっていた。そうすれば、現実に帰ってこれる。後は過去の私が必要としかしてくれないだろう。

「あ、漣奈ちゃんがほっぺ抓ったの、久々に見た」

「いい加減ちゃん付けはやめて……って、今、なんて言ったの、お母さん？」

「え？ほっぺを抓ったの、久々に見たな、って言ったのよ」

……何？久々に見た、だって？私は幼い頃、そんなことをした覚えは一切無い。

「ほんと、昔はすぐにぐいっと伸ばしちゃう子だったのよねー。私が肌が傷むからやめなさいって言っても、首を傾げてそんなことしてないよ、って……なんだったのかしらね。中学生ぐらいからやめてたと思うけれど」

母が何かを言っているが、私の頭には入ってこなかった。とりあえず一人になって考

えたい。夕飯は半分以上残っているが、もう仕方がない。

「ご、ごめんお母さん。ちよつと私、具合悪い……」

「えっ、ちよつと。どうしたの、澤奈ちゃん」

席をゆつくりと立った。震える足で、階段を上がる。母は幼い頃に私が頬を抓る癖があると言っていた。そんなことがあるわけがない。私のことだ、そんな癖があつたらまず私が気付いている。自室に引き籠もつて、扉に寄りかかる。

母がほつぺたを抓るのをやめなさい、と言つても、そこにいるのは今の私ではなく、その当時の、昔の私だ。何のことか分からなくても、当然である。

つまり、ここから分かるのは。私はアルバムを急いで捲り始める。誕生日に撮つた写真を取り出した。数少ない家の中の、それも食卓の写真だ。躊躇いもせず、過去へと飛ぶ。コップを取るふりをして、そのまま落として割つた。すぐさま現実に戻り、一階にもう一度降りる。食器棚を確認すれば、グラスが一つ減つていた。そうして、仮説は確信に変わる。

この能力は、過去を塗り替えることも出来る。どうして分からなかつたのか。私の飛んだ時間は全部家の外で、何かが変わっている事は調べようがなかつたからか。きつと母の一言が無ければ、気付かないままだっただろう。

自室の本棚から、小さなアルバムを引っ張り出した。二度と開かないと思つていた、

陽郁との写真が収められたものだ。彼女は写真を撮るのが好きで、自分のカメラも持っていた。わざわざ印刷して、私のところまで持ってきてくれていたのだ。ツーショットの写真たちを捲っていく。事故の日に撮った写真は——無かった。景品が一つも取れなかったからというのものもあるし、よく考えたら陽郁は帰り道で事故に遭った。もし撮っていたとしても、写真が渡せないのは当然だった。それならどうする。その数日前に撮った写真を使って、忠告する？ 変なことを言い出したと言われておしまいかもしれない。なにより、十分間しかいられないのだ。気持ちを整理して、この事実を伝えることができるかどうかも不安だった。どうすればいい。どうすれば、陽郁を事故から救えるのだろうか。一旦アルバムをしまおうとして立ち上がった、その時だった。

はらり、ひらり。私の足元に、一枚の紙が落ちた。

いや、違う、紙じゃない。思い出した。あの日に撮った写真が、あったのだ。私が拾い上げたのは、ゲームセンター内にあるプリクラで撮った写真だった。あたし達にこういうの、あんまり合わないね、と言って笑っていた陽郁の顔が浮かぶ。そして、撮ったすぐ後に彼女は帰っていったのだ。この写真なら、希望があるかもしれない。前の日に何か言うよりはマシだ。写真を撮る前なら少し時間を稼いでバスが通過するのを待たばいい。撮った後なら引き止めればいい。

これなら、陽郁が事故に遭って、死ぬ過去を変えられる。私があの子を救える、唯一

の希望だ。部屋に鍵をかけ、母が入って来れないようにする。床に写真を置き、息を長く吸って吐いた。やるしかない。人差し指の震えをこらえて、写った自分の顔の上に置く。そうして、シャツターを切るように、瞬きをした。

魂が時間を越えた。あの日へと、私は戻った。

すぐさま左腕に付けた腕時計を確認する。午後四時三十六分。よかった、まだ事故の時間にはなっていない。しかし、既に陽郁は私の近くにいなかった。ここはゲームセンターの二階だが、もう階段を降りて外に出ているもおかしくはない。こういう時に限って、撮った後に飛ばされるなんて。そばにいたら、少し引き止めるだけでよかったのに。かつての私はUFOキャッチャーを一回やって帰ったはずだけれど、今はそんなことをしている場合ではなかった。

手に持っていた財布をポケットへと無理やり押し込み、階段を駆け下りていく。この当時陸上部だった私の足だ、速さには自信があった。そしてそのまま、自動ドアをくぐる。ここに来ても、やはり陽郁はいない。

「まだ、まだ間に合うはず……！」

外は強い雨になってきていた。事故現場までは、恐らく五分程度で着く。傘は差さずに、私の家とは逆方向へと走り始める。

顔に冷たい雨が容赦なく何度も打ち付けた。服が濡れて重くなる。湿気のせいとか、息が苦しい。それでも、助けたいという、その一心で走り続けた。

懐かしい風景が、横に流れる。二人でイヤホンを買った電器屋。通っていた中学校。この天候のせいで、学校に明かりは点いているものの、グラウンドには人っ子ひとりいなかった。水しぶきを飛ばしながら、グラウンドを過ぎたところで右に曲がる。まだ姿が見えない。陽郁の家は門限が厳しかったことを思い出す。彼女も走っていったのか。歩いていたらとつくに追いついているはずだ。

「……いたー」

見つけた。確かに小走りをしている、後ろ姿を捉えた。どれだけ時が経っても、忘れるわけがない。いつも一緒にいてくれた。この日も、雨だからゲームセンターに行こうと声を掛けてくれた。助けてもらっていた。これからどんな思い出を重ねようと、陽郁と過ごした時が一番楽しかったに決まっている。

だから、今度は私が彼女を助ける番だ。運命なんて、打ち破ってみせる。

信号待ちの陽郁へと、私は距離を詰めていく。事故の時間は刻一刻と迫る。一分を切った。もつと余裕を持って追い付きたかったのに、これは大きな誤算だった。いくら傘を差さずに走っても、身体が冷え始めればトップスピードを維持することはできない。足場の悪さも重なって、到着がギリギリになってしまう。声を掛けるのもダメだ。

雨が降っている上に、陽郁が一人の時は、常にイヤホンで音楽を聴いているのを私は知っていた。ここからでは、私の声は届かない。

——信号が、青になった。

こうなつたらもう、形振り構ってられない。視線を左に向けると、明らかに速度の上がつたバスが目に入った。警察の話では、運転手は乗客を降ろした後、回送バスを走らせていた最中に、急性心不全で亡くなつたということだった。アクセルに、足を置いたまま。周りの車も慌てて避けるものの、バスを止めることは不可能。陽郁は横断歩道を渡っているのに、イヤホンで身のすぐ近くに迫つた危険に気がついていない。ここまで来たら、取れる手段は一つしかなかった。

「陽郁いいいいいいッー」

ついに腕時計の針は、事故の時間の四時四十四分を差した。

そしてそれと同時に、私は勢いよく陽郁の身体を突き飛ばした。彼女の差していた青い傘が舞い上がる。片方だけ外れてしまったイヤホンのコードが、宙を切る。なんでここにいるのと言いたげな、その驚いた顔が映る。その全てが、スローモーションに見える。その身体が歩道までよろめいて、尻餅をついたのを確認する。それから私もバスを避けようとした。そうして、目的を達成したあとで、ようやく気付いた。

雨の中走り続けた身体が、もう無理だと悲鳴を上げていたことを。

迫っているバスの速度が、想像以上に速かったということ。

運命の次の餌食になるのは、恐らくは私だということ。

嫌々ながらに、その事実を理解してしまったのだ。

足取りがもつれ、バスの暴走を避けきれなかった私の身体を襲ったのは、強い衝撃だった。全身を激しく叩かれ、身体がちぎれ飛んでしまうのではないかというぐらいの。私の視界が、ぐるんと、回る。何かを噛みきつたのか、口の中に鉄の味が広がる。痛いの一言を上げる間もなく、冷たい地面に叩きつけられた。

こんな痛み、どうでもいい。轢かれようが、追突されようが、私は頬を抓るだけで、現実へと戻れるのだ。陽郁のいる今日へと帰れるのだ。もし通っていた高校が違ったとしてもいい。二人でまた、写真を撮りたかった。けれど、もう腕に力を入れることすら出来なかった。

「滯奈……どうして……」

視界が霞んできたところで、泣き崩れる彼女の声が聞こえた。そう言えば、聴覚は死ぬ時に一番最後に残る感覚なんだっけ。こんな時まで、現実逃避をしよう。陽郁に何かを伝えようとして、声を出そうとしたが、血を吐くことしかできなかった。

ただ、二人で幸せになりたかっただけなのに。

どうして、こうなってしまったんだろう。

停まった乗用車のハザードランプが、まるでフラッシュライトを焚かれているみたいだな、なんて。そんな、最期までどうでもいいことを思いながら、私の意識は闇に溶けていった。



——あたしがこんな力を使えるようになったのは、いつからだんだらう。

滯奈が私を庇って、病院のベッドでずっと眠ったままになったあの日から、長い間カメラを使わなかったもんだから分からない。手元にある卒業アルバムが、あたしの写っている久々の写真だった。

とりあえず分かっているのは、人差し指で触れて瞬きをすると、時間が越えられること。つまりはタイムスリップの能力だ。

あたしは滯奈が庇ってくれなかったら、間違いなくあそこで死んでいた。あの子を寝たきりにさせてしまったことを、今でも後悔している。だから、詳しい使い方が分かったら、過去を変えられるかどうか、試してみようと思う。

きつとこれは、あたしがカミサマから与えられた、チャンスだから。

無意識エスケイプ

誰かが私を呼んでいる。とてもあたたかくて、安心できる声だった。

その声に引つ張られるように、私は――

「おい、君。おーい」

左頬を横に引き伸ばされ、私は微睡みからゆっくりと覚めた。優しい風が頬を撫でる。上体を起こすと、頭がずきりと痛み、私は思わず短く呻いた。

「お、やっと目が覚めた。どうかな、気分の方は？」

私の頬を伸ばしたこの声の主は、左隣に屈んでいる女の子らしい。華奢で小柄な体と、少し高めの可愛い声から、すぐ女性だと分かった。着古しているのか、少し傷んだ、足元まで覆われている服を羽織っついていて、フードを目深く被っている。その下から覗く銀髪は、肩の長さまで伸びっぱなし。そして肌は雪のように白く、不健康にも見える。「そんなにじろじろ眺めるのは、失礼だと思うんだ」

少女は頬を膨らませると、目元を更に隠すようにフードを下に引つ張ってしまった。「それで、キミはどうしてここに来たんだい？」

「私？ ええっと、そもそもここがどこなのかも分からないんだけど」

顔をぐるりと動かし、少し周りを見渡してみる。私が眠っていたのは大木の下で、周りには赤くて細い花弁が特徴的な、儂げな花が咲いていた。

しかし、私はこの風景に全く見覚えがなかった。私はどうしてこの場所にいるのか、今まで何をしていたのか、眠る前の記憶が抜けてしまったみたいになすつからかんの状態だ。困り果てて隣の彼女を見ると、何かを察したのか小さく笑った。

「記憶喪失、か。ボクはグリム、よろしく。キミの名前、覚えていたら教えてほしいな」
グリムと名乗った少女——その一人称と喋り方で、見た目とは違い中性的な雰囲気の子だと思った——は先に立ち上がり、私に右手を差し伸べてきた。その手をそつと取って、引き上げてもらう。

「私は……あります。こちらこそよろしく、グリム」

「アリスか。うん、いい名前だと思う。積極的に呼びたい」

「そ、そう？　ありがとうでいいの？」
彼女は口元だけでそつと微笑みを浮かべる。ほんのり紅い唇に、目が引き寄せられた。

「ふふ、どういたしまして。で、アリスはこれからどうするつもりなのかな」

グリムに下から顔を覗き込まれて、あれこれ考えてみる。目覚める前の記憶が無いから、帰る家も分からない。しかし、どこかに何日も泊まれるお金の当てもなかった。

「とりあえず……野宿とか？」

私が困り果てて言うとう、目の前の彼女はぶふつ、と噴き出した。

「ここで野宿する気かい？ 食料はどうするんだ。それに外には危険がいっぱ——」

前言撤回、私に野宿は無理だと悟った。手を雑に横に振って、グリムの話を遮った。

「あーもう、私が悪かったから……それなら、どうすればいいの？」

「一つだけ方法があるよ、エマ様に会いに行くっていう」

彼女は人差し指を立て、記憶の無い私ですら、聞き慣れない単語を発した。名前からなんとなく、神々しいオーラを纏った美女を思い浮かべる。

「エマ様……って、誰なの」

「説明が難しいけど、会えばアリスのことを教えてくれる。それはボクが保証するよ」
「随分自信があるのね……？」

私に分からない私のことを知っているなんて、見透かされているみたいで何だか気分が悪い。訝しげな目線でグリムを見てみると、彼女はため息をついて、

「記憶のないアリスに簡単に説明すると、エマ様はヒトじゃないんだ。ここら辺一帯を管理している、カミサマみたいなものだよ」

と難しいと言った説明を付け加えてくれた。しかし、記憶のないアリス、の箇所の語気を強められると、自分が情けなくて黙るしかない。なるほど、神様か。それなら私の

ことを細かく知っていても、そこまで不思議でもないような気がした。

そうでなくても、記憶のない状態で外にほっぽり出されているよりかはマシだろう。

「……分かった。それなら私、エマ様に会いに行く」

「よし来た、それならここで会ったのも一つの縁つてことで、ボクが案内するよ。一人では道も分からないだろうからね」

そしてグリムは少し歩いて立ち止まった。私が早足で横に並ぶと、彼女は前を指差す。

「丘を下って少し行くと、町がある。そこで腹拵えをしようか。お金はボクが払うから」
目を凝らすと、確かに大きな門が見える。空腹は感じていなかったが、私は黙って頷いておいた。奢りなら断る理由もない。私の反応を見ると、グリムは満足そうに笑った。相変わらず鼻と口元しか見えないが、そこが綻んでいるのが分かる。

「よし、決まりだね。ついてきて」

門までならかな一本道を下っていく。家や店はなく、ただっ広い草原が広がっているだけ。しかも、私たち以外には人の姿が見えない。空は明るいのに、少し不気味に思えるぐらいに静まり返っている。グリムが言いかけた、外が危ないという言葉を出した。

「ねえ、門の外に人はいないの？」

「人がいないってわけじゃないんだ。ずっとここに留まっているのが好ましくないだけ」

「好ましくない、ってどういうこと」

私が首を傾げると、グリムはとても不機嫌そうなトーンで続けた。

「アリスみたいに一人でいる子を狙う悪質な輩もいるってこと。ボクらの仕事は、そういう悪いヤツをしよっぴくのと、キミのような迷っている子を案内することなんだよ」「うーん……それって大変な仕事じゃないの？」

「真面目にやっているとは大変だね。でもボクがこうやって案内役を買って出るのは、アリスみたいなイレギュラーの子が見えた時だけ。好奇心半分ってヤツかな」

人が困っているというのに、悪びれもなく不謹慎なことを言う子だ。しかしこれから救ってもらおうのも確かなので、そこには特に何も言わないでおくことにした。

「そら、門だよ。ふむ、今日はあんまり並んでないな」

会話を夢中になっていて、彼女に言われるまで気が付かなかった。目の前には巨大な濠があり、そこに横幅の広い橋がかかっている。そしてその先に、随分頑丈そうな見た目の門がどっしりと構えていた。つい見とれてみると、グリムに服を引っ張られてしまった。

「並ぶって……あれ、何してるの？」

グリムと似た服の二人組が門の前に立ち、中に入ろうとしている人に話しかけている。

「入るべきではない人が入らないようにしている。検問みたいなものだよ」

私たちの前には四人並んでいたが、背格好も、見た目年齢もバラバラ。よぼよぼの杖をついたお婆さんもいれば、妙にしっかりした服装のおじさんもいる。と思えば、私とそう歳の変わらないように見える少年まで、さまざまなラインナップだった。

「アリス。ボクだけじゃなく、他人のことをジロジロ観察するの、やめた方がいいよ」

グリムにそう窘められるまで、舐め尽くすようにその人たちを眺めていた。特に正装姿のおじさんは、目の前の門とあまりにも合わないのに、さらに気になる。一方私が着ているのは、上と下が繋がっている服だ。下はひらひらした布で構成されていて、少しそわそわする。柄は白に黒い水玉模様だ。上着は羽織っていないが、特に寒さは感じなかった。

前に並んでいた、背が高めのスタイルのいいお姉さんが町の中に入っていくのを見送ると、いよいよ私たちの番だ。私はグリムの陰に隠れるようにして、橋を渡り終える。

そうして門番らしき二人の前に立つと、右側の男が驚きの声をあげた。

「おい、グリムじゃないか！ お前がここに来るなんていつぶりだ？」

グリムと服装こそ同じだが、門番の方が背が高いため、少し見上げればフードの中が

見える。そこから覗く目は、妖しく紅く光っていた。正直、かなり不気味だ。

対するグリムは、かなり落ち着き払った様子で、

「久しぶり、モルテ。さあ、いつぶりだろうね。ボクはかなり気まぐれだし、面白い方に流れていくだけだよ」

と、軽く流していた。この態度は素っ気なく見えるけれど、私からすると、とても安定していて安心感がある。私は彼女を盾にするように、その背後へと隠れた。しかし、「で、その嬢ちゃんはどういう事情でここに来たんだ」

いきなり左側の男がそう問いかけてきたものだから、思わずびくりと体を震わせてしまった。どう答えればいいのか分からない。グリムはそんな私の方をちらりと見ると、人差し指を自分の唇に当てる。そして小声で大丈夫、任せておいてと告げて、

「ちよつとね、家族とはぐれたらしいんだ。娘を探している親は来なかつたかな？」

トーンを変えずにさらつと嘘をついた。目を丸くする私に構わず、彼女は話を続ける。

「娘を探す親だあ？ 今日は見えてねえな。お前が本気で探せば見つかるんじゃないかねえのか」

「はは、ボクはよつぽどのがない限り、本気を出すのはごめんだよ。それこそ笑い転げるぐらいの面白いことじゃないと」

「ホント、勿体ねえな。お前ぐらい優秀なヤツが、フラフラしてんのは。オレだったらあちこち巡って稼ぎまくりよ」

「お世辞は結構。もういいかな、早いところ町に入りたい。この子がお腹を空かせてる」
グリムが一步踏み出してそう言うと、門番二人は顔を見合わせた。同じタイミングでため息をつく——仕方ないな、という気持ちが伝わってくる——脇に逸れ、道を開けた。

「さ、行こうか。人が多いから、はぐれないように」

彼女は私の手を握ってきた。温かいても冷たいとも言えない、握っている感覚がゼロと言っても過言ではないような、不思議な手だった。

「あの、ありがとう」

「気にしないでいいよ、これぐらいはしてあげないとね」

私が感謝を述べると、グリムは右手を横に振りながら、くすりと笑みを浮かべた。これが、面白いものが好きな彼女の癖なのだろう。その笑顔を、私は羨ましく感じた。

「よし、こんなものでいいかな。遠慮なく食べていいよ」

町に入った私たちは、人の波に揉まれつつ、最初の目的である飲食店の中へと入った。席に向かい合って座ると、メニューに目を通したグリムが適当に注文をする。目の前にいろんな料理が並べられていくのを、私は呆気に取られて見ていた。

「ええつと、あの、グリムってお金持ちだったりする？」

このままがつがつ食べ始めるのも気が引けるので、質問を投げてみる。一方グリムは、彼女が一番近くに置かれた白い麵を早速啜っていた。

「んむ、そうだね。ボクは同業者の中では優秀な方、かな。単純に強いだけって感じだけども、もつと真面目な頃もあつたから、その時のお金がたくさん残ってるのさ」

「え、真面目だったんだ……全然そんな風には見えない」

実際、グリムには自由奔放という四文字がこれでもかというぐらいに似合うと思つた。

「成績がいい分、妬まれちゃってね。どんどん孤独になった。だから、自由にやらせてもらうことにしたんだよ。エマ様から一定のノルマは課せられているけどね」

思っていたよりも事情が深そうだった。話題が重くならないうちに、一番近くの炒めご飯に手をつける。口に入れてみても、味がよく分からなかった。

「そんな難しい顔をするものじゃないよ、ボクは大して気にしてないし」

食べる手を止めないところから、大して気にかけていないのだろう。しかし私は、彼女のそんな態度すら悲しいと思つた。独りが寂しいのは、誰だって知つてのことだ。

「でも、グリムは悪くないのに」

「ボクが完璧に正解っていう保証もないよ。あの時に周囲と足並みを揃えてれば、目を

つけられることはなかっただろうし。出る杭が打たれるのは、世の常だよ」

そう言つて彼女は手に持った食器をくるくると回すと、ボクつて自由人だからさ、周りの気持ちなんて分からないだよ、と付け加えた。

「だけど、貴女が優れているからつて、それが虐げられる理由にはならないでしょ」

「あはは、これはお話が平行線になりそうだね。勿論、アリスの言うことも間違つちやいない。でも、いいんだ。ボクは今のボクの方が好きだから」

既にグリムは五皿を平らげた後だった。細い体のどこに入るのだろうという量だ。

「それにアリスと会えた。昔のボクじゃ、この出会いはなかったよ。これは確実さ」
「むっ。そういうことを言われると、私も言い返しづらい」

私が頬を膨らませると、彼女はまたくすりと笑つて話を続ける。

「あの場所、キミみたいに子供が一人でいるのは別に珍しいことじゃないんだ」

「……そうなの？」

「ああ、一つしかない通り道だし。さつきボクが適当に言つたように、親と一緒にたけどはぐれた子とか、そもそも一人で来ている子とか。人によつて事情は様々だけどね」

「でも、私はそれすら覚えてないんだけど」

「そう、それが問題だ。自分のことが分からないままじゃ、手の打ちようがない」

あれだけたくさん料理が並んでいたのに、すつきりしたテーブルに突っ伏す。

「なんで、忘れちゃったんだろう……」

私は小さい羽虫が鳴くような声で呻いた。自分にまつわる記憶がすつぽり抜けている。思い出そうとしても、「頭に不快な靄が溜まっていくだけだった。」

「いやいや、アリスはちゃんと覚えてるよ」

グリムが私の顔を覗き込む。口の端に赤いソースを付けたまま。

「全部覚えてるけど、無意識の内に避けて——逃げてるだけ。辛いことからね」

「なんでグリムがそんなこと分かるの」

「……さあね。強いて言うなら、アリスとボクは一緒ってことかな」

「なにそれ、余計わかんない。でも、逃げているだけ、かあ。嫌なことから……」

私は突っ伏した姿勢から起き上がる。そして、宙を見たまま一瞬考え込んでしまった。異変は、まさしくその時に起こった。

『あいつ、ずつとすました顔して感じ悪いよな』

『ほんつと、優等生气取ってんのって感じ』

『ありすなんて名前して、あいつの家、超貧乏らしいぞ』

『なにそれ傑作。すつごい名前負けじゃない』

「——ッ!？」

視界が歪む。慌てて立ち上がったグリムの輪郭が揺らいだ。目の前が暗くなり、光が

弾ける。頭が痛い、苦しい。まだ思い出してはいけない、と警鐘を鳴らされている。

「しっかりして、ありすー！」

耳元で声がする。手をきつく握られるのが分かった。ほんのり暖かくて、それに少し安心して、私はゆっくりと手を握り返し、意識を手放した。

体が上下に動くのを感じて、目を開く。開眼一番目に入ったのは、グリムの背中だった。何秒か固まった後に、現状を理解し声を張り上げる。

「な、何考えてるの!?!」

「落ち着きなよ。気絶したキミを店の中に置いていたら迷惑だろう。だから店を出た」

「おぶって歩く必要はどこに!?!」

「え、何。お姫様抱っこをご所望だったのかな」

そんなことをされたらたまったものではないので、グリムの後頭部に軽く頭突きを食らわせて、降ろしてもらった。引き摺って歩いて貰っていた方が良かったかもしれない。

「いたたっ……まったく。遠慮のない子だよ、ほんと」

「グリムに言われたくないんだけど」

じとり、と呆れ顔でその横顔を見つめると、彼女はそっぽを向いて口笛を吹き始めた。「とにかく、今はあまり思い出さない方がいいみたいだ。まだその時じゃない、そんな気

がする。何事にもタイミングってものはあるから」

気を失う前に流れたあの映像は、私の記憶で間違いないだろう。しかしグリムが言うように、思いだそうとする度に倒れてしまうのなら、体がもたないのは確かなことだった。

「こうなると、先を急いだ方が良さそうだね。このままじゃ不安過ぎるから」

「やっぱり、エマ様に聞くってこと？」

「そうなるね、でも半分ぐらいは来たよ。キミがぐったりしている間にだいぶ進んだ。さつき町を出たから、暫く歩いて川を渡れば、エマ様の住んでいる場所はすぐそこさ」

私が振り返ると、先程見たものと瓜二つの門が立派に構えているのが分かった。随分狭くて閉鎖的な町だなと思う。しかし過ぎたことより、私はこれからの行程が気になった。

「川……川ね……」

「あれ、泳げなかつたりするのかい？ 平気だよ、船があるから」

「そういうわけじゃないけど。なんか怖いなって、なんとなく……」

「はは、恐ろし克的を射ない答えだね。もう無理して思ひ出さなくていいけど」

霧がかかったように一切が思ひ出せないのも気分が悪いが、また倒れてしまえば彼女に迷惑をかける。私は頭を横に振って無理矢理思考を断ち切った。

「そんなに振ったら頭がふっ飛ぶんじやないかな」

「ふっ飛ぶわけではないですよ」

彼女の冗談に突っ込みを入れ、歩みを進める。町に入る前の草原とは違い、ゴツゴツとした岩場が多くなった。少し歩きづらいのと、見ていてあまり気分が落ち着かない。こんな場所にエマ様は住んでいるのか。それとも、川を渡ればまた違う風景が広がっているのか。いろいろな考えが浮かんでは消えたが、今はグリムについて行くしかなかった。

「お、開けてきた。アリス、そろそろ川が見えるよ」

急な石段を転ばないよう慎重に降りると、やたら石が多い、広い河原に出た。川の向こうを見つめると、対岸に島があるのが分かった。あれが目的地のようだった。

「ボクもここに来るのは久しぶりだ。長らくサボっていたからね」

「向こう岸にエマ様が住んでいるのよね？」

「そう、だからあとちよつと。船のある場所はこっちだ。付いてきて」

左の方向へと川沿いを下っていく。程なくして栈橋と、船が二隻見えた。グリムが船頭さんに運賃を渡し、私たちは船に乗り込む。足元がふらふらして、やはり怖い。気を付けつつ座ると、恐らく木材でできている簡単な作りのそれは、静かに発進した。

空を見上げると、黒い毛なみの鳥が彼方へと飛んでいった。そして遠くから、ぴつ、

ぴつ、という甲高い鳴き声がする。嘎れた声を想像していたので、違和感を覚えた。「どうして仏頂面で空を眺めてるのさ」

向かい合つて座っているグリムが、私の方を見て言う。

「鳥の鳴き声が変わなつて」

「鳥が？ 記憶が無いのに変だつて言うなんて、それこそ変なことじゃないかな」

「それはそうかもしれないけれど……」

「ほら、あんまり考え込むのは止した方がいい。船上で倒れるのは勘弁してほしいな」

けらけらと笑つて、グリムは懐から棒状の包みを差し出した。

「飴、あげるよ。さつき川が怖いつて言つていたから、これで気持ちいが紛れたらいいな」

こういう思いやりを見せられると、どれだけからかわれても私は彼女を憎めなくなりそうだ。包みを解くと、細い棒にくつついて、ギザギザの波線のような形の、薄い黄色の飴が出てきた。ほんのり果実のような甘い香りがしたが、口に含んでみると味がよくわからなかった。船の上で余裕がないからか、またはここら一帯の食べ物あまり美味しくないのか。しかし気が紛れるのは確かだったので、私はグリムの優しさをありがたく思った。

飴が舐め終わる前に、船は対岸へと達した。船頭さんにお礼を述べて、陸へと上がる。

「で、エマ様はどこにいるの？」

「なかなかキミもせっつかちだね。というか見てわからないかい、あれ」

もはや指を差すまでもないと、グリムは顎で道の先へと私の視線を促す。そこには城と言つても過言ではないぐらいの、巨大な屋敷が構えていた。

「さ、行こうか。ここまで来ればもう終わったようなものだし」

「……グリムともお別れ？」

「それはどうだろう。アリスがこれからどうなるか、決まったわけじゃないから」

そうだ。記憶を取り戻した後の私は、どうすればいいのだろう。全てを思い出せば、自然に理解出来るのかもしれないけれど。近くで翼を休めていた黒い鳥が羽ばたいて、また甲高い鳴き声が聞こえた。先程のものより、間が長くなっていた気がした。

先導していたグリムが金属で出来た門を押し開ける。門番はいない。庭は薄暗く、道の脇に灯った火が、私たちの影をゆらりゆらりと照らす。屋敷の扉が、重苦しい音を立て、ひとりでに開いた。霧囲気に吞まれ、私は一言も発せられなくなった。

エマ様の部屋はどうやら地下にあるらしい。私はグリムの後にぴったりと張りつき、ぐねぐねとした通路をあちらこちらに曲がり、緩やかな階段を下つていった。

「さあ、ここだ。並んでいて。なるべく静かにね」

一際大きい扉の前に立つと、グリムは上を見上げて言った。私は言われた通りに、前にいるおじさんの後ろに並ぶ。それを確認すると、また後でね、とだけ残し、彼女は奥

の通路へと消えていった。一人になって視線をさまよわせていた私は、そこであることに気付く。前に並んでいるおじさんに、見覚えがあったのだ。

町の前の門に並んでいた人だ。服がぼろぼろになっていたので、気が付かなかった。そして何を思ったか私は、彼の背中を押して、声をかけてしまった。

「……あの」

不思議そうな顔で、おじさんが振り向く。やつれていて、顔も痣だらけ。顔色も悪い。今まで後ろからしか見ていなかったせいも、後ろ姿とのギャップに驚いた。

「ええと、その。さつき町の前で見かけたんですけど……その傷、どうしたんですか」

「ああ……。自分のしでかしたことに後悔して、やつぱりここから逃げたいって思った。でもあつげなくフードのやつらに押さえられた。これはそんな時の傷」

「え、悪いことしたんですか……?」

私には、目の前のおじさんが悪い人には見えなかった。人を見かけで判断するのはよくないけれど。それよりも、逃げたい? 何のことを言っているのか、理解できなかった。

「迷惑かけたから、悪いことをしたのかもな。電車に突っ込んで自殺したんだ、俺は」
「え……?」

「いや、死後の世界なんてあるんだな。生前は鼻で笑い飛ばしていたけど、今こうなっ

ちや全く笑えないわな」

「え、あの、死後の世界って。私、記憶が……」

質の悪い冗談かと思っただけれど、その一言が引き金になり、私は全てを思い出した。彼岸花。グリムのここに留まるのはよくないという言葉。味のしないご飯。意識を失っていた私を運んだグリム。彼女が急いでいたのは、倒れた分のロスを回収するためだろう。石だらけの河原。変な鳥の鳴き声。舐めた餡は卒塔婆の形。

グリムは最初から、私をここに連れてくるのが目的だったに違いない。フードの中の彼女の顔がどう動いていたのかを、私は知らなかった。口元の微笑に、騙されていたのだ。

——しつかりして、ありす！

驚いた顔のおじさんを後目に、私は逆方向へと逃走を始めた。もう形振り構っていられない。グリムが気がつく前に、この屋敷から脱出しなければ。階段を駆け上り、通路を右に曲がる。そしてまた階段を上る。しかし、そこで私の足は止まった。部屋に行き着くまでに、やたら何回も曲がるなど疑問には思っていた。グリムは道順を完璧に覚えていたようだけれど、私にはどの階段を使って、どの通路を通れば外に出られるかが分からない。物陰に縮こまり、これからどうしようか考えていると、近くで話し声が聞こえた。

「子供が一人、消えたんだってな」

「がはは、子供か。すぐ捕まってエマ様の前に引き摺り出されるに決まってるあ」

「まずいことになってしまった。どうやらグリムはすぐに戻ってきたらしい。このままでは、時間が経つほど逃げるのが困難になる。今すぐにでも地上に――」

「早く戻らないと、なんて考えているのかな、キミは」

足音は聞こえなかったのに、私の真上で声がした。視線をゆつくりと上に向けると、ローブ姿の少女が立っていた。……グリムだ。

「そんなに怯えた表情にならなくてもいいよ、ボクらはキミを、煮たり焼いたりして食らうわけじゃないんだから。さ、戻ろう」

「嫌だ、私が戻るのとは下じゃない、上なの!」

「アリス、キミに手荒な真似はしたくない! ボクの言うことを聞いてくれ」

「今信じろって言うの!?! 私のことを騙すような真似したくせに!」

「それは……でも、本当のことを伝えたら、確実にキミは混乱しただろ」

よく聞いてくれ、とグリムは私の隣にしゃがみこんだ。

「そもそも、アリスが逃げたと言いつらしたのはボクじゃない。キミの前に並んでいた人だ。教えたら自分の罪が軽くなるでも考えたんだらうね。今更無駄なんだけど」

彼女は大きなため息をつく。心底退屈だ、という気持ちが込められている気がした。

「それに、キミは望んでここに来た。川に飛び込んで、死のうとしたんだ」

耳を塞いでしまいたい程の事実を突きつけられる。でも、今更後には引けなかった。

「後悔してるんだってば、だから戻りたいの！」

「ボクさ、別に逃げることは悪くないことだと思うんだ。キミみたいな小さな子が自ら死ぬ道を選ぶなんて、よっぼどひどい経験をしたんじゃないかな」

ぼん、と頭に手を置かれる。温もりがない、生きているとは思えない体温だった。

「騙したのは謝る、確かにボクはエマ様に命令されて動いていたよ。アリスのことを最初から知っていたし、キミに詳細を伝えずにここに来た。でもアリス、この世界に来てまで傷だらけになる必要はない。ボクが傍にいれば、キミには誰だって手出しできないさ」

「確かに私は、グリムと同じだった。嫉妬されて、一人になった。それが辛くてここに来た。でも、私は帰りたいの。自分勝手かもしれないけれど、私を呼ぶ声があるから！」

「アリス、キミの手……！」

グリムが声をあげる。自分の手元を見ると、ゆつくりと自分の体が点滅しているのに気が付いた。私の手を通して、地面が見えたり見えなかったりを繰り返している。

「この世界でのキミの存在が、揺らいでいるんだ。前兆はあったから、早めにエマ様へと

引き渡したかったけど……もう遅いや。戻りたいっていう意志は強固みたいだね」

そう言つて笑うと、彼女は左右を確認して立ち上がった。

「ここはアリス一人じゃ戻れないからね、ボクが案内するよ」

「え、いいの？ 道だけ教えて貰えばいいんだけど」

私がそう聞き返すと、グリムは呆れた、という風に天を仰いだ。

「追つ手が来るに決まつてるだろ。脱走者をむぎむぎ見逃すボくらじゃない」

「だったら、尚更！ グリムだつて、そちら側でしょ？ 私を見逃すだけでいいから」

「あーあ、さつき言つたばかりなのに。もう忘れちゃつたのかな」

グリムがフードを脱ぐ。透き通つた赤い瞳が露になり、私の視線を釘付けにした。

「ボクは面白い方に流れるんだよ。さ、行こうか。キミの、最後の逃避行だ」

差し出された右手を掴む。遠くから走る足音が聞こえ、私たちは顔を見合わせた。

「走るから、しつかり付いてきなよ」

「言われなくても分かつてる！」

服の裾をはためかせ、前を行くグリムは迷いなく右へ左へと曲がる。私はその後を必死に追つた。階段を一段飛ばしで駆けていくと扉が見え、グリムが蹴飛ばして開け放つ。階数を重ねる毎に、追つ手が多くなつて来ているのを感じて、思わず身震いをした。

門を抜け、直線の道を全速力で走り抜ける。目の前に川が迫つてきた。

「そういえば川、どうやって越えるの？ グリムって船は漕げる？」

「脱走はノープランでしないでくれるかな。勿論漕げないから、ちよつと失礼するよ」

脚と肩に触れたかと思えば、私は軽々と彼女の胸の前へと持ち上げられていた。

「結局することになつちやつたね、お姫様抱っこ」

恥ずかしさで顔が真っ赤になった。しかし、この体勢でどう川を越えると言うのか。

「そういう伏線は回収しないでいいから！ で、水の上でも歩いていくの？」

「当たらずとも遠からず、かな。こうやって行くんだ！」

助走を付けると、グリムは川へ向かつて跳躍した。驚いた私は、落ちない様に彼女にしがみつく。そうして川面が近づいた、と思つた瞬間にはまた空へと浮かんでいた。信じられないことに、水面上をジャンプして渡っている。

「なんで行きは使わなかつたの!？」

「今は非常事態だし！ キミがいる分、これでも遅い方さ。船で移動したら秒で捕まる」
ふわりと対岸へと着地したグリムは、私を優しく降ろしてくれた。後ろを見ると、川の上を渡ってくる影が見える。皆一様にローブ姿だ。ざつと数えただけでも五十人以上はいる。恐ろしくなつて、私たちはまた走り始めた。

「やれやれ、優秀なことだ。ま、走り続ければ追いつかれやしないよ、急ごう。キミの体が完全に見えなくなる前に、あの大木の場所まで行かないと」

「見えなくなったらどうなるの？」

「それ、この状況で聞く？ 向こうにも戻れず、こっちにも受け入れられず、永遠にさまようことになる。ちなみに今から屋敷に戻っても遅い。捕まったら最悪だ」

河原と岩だらけの道を抜け、町に入るのを止めようとする門番をグリムが突き飛ばす。驚いた眼差しの通行人を押し退け、置かれていた樽を蹴飛ばし、それでも走るのをやめなかった。騒ぎが大きくなる度に、グリムの口元はにんまりとじていった。

「ほんと、グリムって愉快犯みたい」

「あながち間違っちゃいないね、ボクは面白くてやって——」

言葉を切り、グリムが視線を空へと向ける。そしてその目を細めると、顔を歪めた。

「まずい、鳥だ。伝達用の手紙をぶら下げてる。モルテに伝えるつもりだ。さすがに追いつけないと思ったか……なにかあったらボクが食い止めるしかないか」

グリムは真剣な表情で私の方を見る。どう答えればいいのか分からない。

「で、でも、グリムは」

「ボクは一緒に行くわけじゃない。キミが帰れたら、それで勝ちだ。迷ったらダメだよ」
とうとう私たちは門に辿り着いた。そしてグリムが危惧していたように、二人の門番が道を塞いでいる。間をすり抜けたら捕まってしまうだろうか。左側の男が口を開いた。

「伝書が来た。グリム、てめえ、どういうつもりだ？」

「出来ればその質問は後にして欲しいね。十五分後ぐらいにしてくれるとありがたい」
「無駄口を叩くな！ 良いから、そいつをこちらに引き渡せ」

右側の男が一步、こちらに踏み出した。しかし、下がるわけにもいかない。

「面白い冗談を言う、この子の体がどうなってるか分からないのかい？」

「てめえは甘いんだ、グリム。必要以上に死者に情けをかけるな」

「アリスは死んでない、まだ戻れるんだよ。今すぐそこを開けてくれさえすれば、ね」

「俺たちまで裏切り者にする気か？ 優秀なお前と違って、下つ端の俺たちは、そんなことをすれば門番すら出来なくなるんだぞ」

左と右の男が、口々に言う。後ろのざわめきがにわかになんて大きくなってくる。

「ああ、ホント。うんざりするんだ、警告しているのに聞かないやつって」

そう呟くと、グリムは右の男に向かってスタートを切った。私と走っていた時とはスピードが違う。これが彼女の本気なのか。

「グリム、てめえ何を……ぐっ!？」

軽く跳躍すると、左の男の顔面に素早く膝蹴りを浴びせる。その一撃で男はよろけた。そして彼が背中に背負っていた鎌を奪うと、右側の男に向けて振るう。呻き声とともに布が切り裂かれ、彼は尻もちを付いてしまった。流れるような、鮮やかな手際だ。

「ボコボコにすると悪いからね。それより、もう時間がない。無駄な時間を食った」
自分の体を見下ろすと、私が気付かないうちに、腕がほぼ透明な状態になりつつあった。男の体を飛び越えると、町を後にする。

ようやく、私とグリムが初めて出会った場所、あの大木が見えてきた。私たちは手前の丘の前で止まった。グリムが深呼吸をして、私の方を向く。

「あの木の向こう側が、キミの世界へと繋がる帰り道だ。覚悟はできたかい？」

「あの、グリム……ありがとう」

私が一つうなずいて言うと、彼女はきよとんと目を丸くして、

「いいよ、ボクも面白いものを見せてもらった。逃避行も、これで終わりだけ——」

それから、目を細めてにこりと笑った。あの世で一番輝いている笑顔なのだろうかと、確証もなかったけれど、そう強く感じた。

「——次に会う時は、キミがおばあさんになっっていることを祈るよ」

だから私もつられて、涙を浮かべながら微笑を浮かべる。別れたくない、と思った。「うん、その時は、また」

「ああ、迎えに来る。だから、それまで少しだけお別れだ」

背後の喧騒が徐々に大きくなってくる。グリムが私の背中に、右手でそつと触れた。

「時間だね。あ、またすぐ来たとか言ったら、その時は首を撥ね飛ばすから」

「えっ。死後の世界じゃ、死なないんじゃない？」

「死なないけどすごく痛いと思う。くっついたらまた撥ね飛ばす」

くすり、と彼女らしくグリムが笑う。私は大木の向こうを見据えた。暗闇が広がって
いて、何も見えない。

「これは、私が選んだ道だから。もう後悔しない」

「……うん、それでいい。じゃあね、アリス。キミに会えてよかった。ボクの方こそ、」
ありがとう、と唇が動くのが見えた。グリムの背後から迫り来る追っ手たちと、呑気
に手の平を振る余裕な態度の彼女が、とてもおかしくて、私は大きく叫んだ。

「またね、どうもありがとう！」

刹那、闇が私を飲み込む。自分が上っているのか、下っているのかさえ分からなくな
る。揉みくちやにされ、それでも必死にもがき続ける。戻りたい、と強く願った瞬間、眩
い光に包まれた。キミはよく頑張ったよ、という彼女の声が聞こえた気がした。

「……す、……りす」

誰かが私を呼んでいる。とても暖かくて、安心出来る声だった。その声に引き上げら
れるように、私は。

「ありす！ よかった……」

ゆつくりと目を醒ました。視界に白い天井が映る。すぐ隣に座っていた女性が、私の

右手を握って、ベッドの上の私を見つめている。顔には涙の痕が見え、目は腫れぼったい。お見舞いを持ってきたのか、柵に綺麗な花と林檎が置かれていた。

「おはよう、お母さん。えっと、ただいま？」

「バカ、心配したのよ、本当に……！」

ゆっくり起き上がると、痛いぐらいに抱きしめられる。触れた温もりが、耳元でするすすり泣きが、私に生きているということを感じさせた。

あの世界は、本当にあったのだろうか。たとえ私の夢だったとしても、次に彼女に会う時には、胸を張れるようにしたいと思った。

カーテンが揺れ、私の風を頬が撫でる。真夏の太陽が、病室を静かに照らしていた。

〈二次創作・小咄〉プラネット・ワインドアップ

どうして、目を合わせてしまったのだろうか。あくまでも無慈悲に、冷徹になろうって最初に決めていたはずなのに。

僕の光線銃を持った2本目の触手がぶるぶると震えている。無理やりに3本目の触手を伸ばしてそれを止めようとしたけど、ダメだ。一度揺らいだ決心が簡単に戻らないのはよく分かっていた。

「……撃た、ないんだ」

ガラクタの積もった廃材置き場で、目の前にいる人間の少女が驚いたような声を発した。僕の頭にある2本の触覚が、彼女が『そう』言ったのを感じ取る。違う、撃たないんじゃない、撃てなくなっていた。銃を握った触手を、僕はゆつくりと下げる。煤混じりの風が吹き、少女の赤みを帯びた茶髪がふつと揺れて。その下から透き通った寂しい瞳が覗いた途端に、僕のあやふやな覚悟とか決意とか、そんなちやちなものは一気に砕かれてしまったんだ。

僕と彼女の物語は、こうして始まりを告げた。

「あたしはサラ。ええつと……とりあえずよろしく、エイリアン？」

ここにいたらキミもやられるから、と言われて半ば強引に案内されたのは、廃墟になった人間の住処だった。屋根と壁の穴が空いている場所が、適当な板で塞がれている。

「つまりここがサラの拠点……?」

「うわあつと!? そんなによろししたルックスなのにこつちの言語が話せるんだ。ずつと一言も喋らないから、全然伝わってないかと思つた」

「意思疎通に問題はない、心配しなくていい。僕はルイ。よろしく」

僕が一本目の触手をふわんと挙げると、サラと名乗つた少女は眉間にシワを寄せ、自分の手で頭をぼりぼりと搔いた。によるとは言われたけれども、今の僕は人間に擬態しているから、ちよつと六本触手が生えているだけで、あとは人の体そのものだ。

「あー、うん。咄嗟に匿つたはいいものの、明日になったら取つて食われたりしてないよね……」

地球人をぼりふにや食べる趣味はないのだが、サラがあまりにも憂鬱そうに溜息を吐くから、僕は少し考えて、

「なら、どうしてここに連れてきた」

と、顔を黄色くして言った。僕の顔が黄色になるのは疑問に思つた時だ。

「なんとなく。あたし、争いは嫌いだからね。こつちを攻撃する気がないなら、あたし

「だってキミを傷つける必要はない」

「実際この物騒な銃も撃たなかったし、と彼女はテーブルに置かれた僕の銃を撫でて言った。」

「それ、撃つと物質を微粒子まで分解できる。あんまり触らない方がいい」

「あはは、知ってる。人が砂みたいに一瞬で消えるの、嫌ってほど見てきたから」

「死骸が残ると後々処理が大変だからと言われて渡された」

やはり危ないと思うので、触手をふにんと伸ばしてその銃を自分の懐にしまった。そんな僕に対して、サラは警戒する素振りもみせない。

「はーあ。自分たちの勝利前提かあ。そりやそうだろうけどさ……」

そう言つて、彼女はやっぱり憂鬱そうにテーブルに突っ伏した。それを見ると、何故だか僕の3番目の心臓が喚くから、兼ねてから実行すると知らされている作戦の話をした。

「勝敗はもうすぐ決まる。かなりの人類を掃討したから、そろそろ最後の仕上げをする」と聞いている」

「なに、巨大ビームでも打つつもり？」

「近い。でも、町中がサラの見たように砂みたいになる」

「……なにそれ、聞いてない」

「言ったら作戦にならないから、言つてない」

「いや今思いつきあたしに向かつて言つちやつたよね？」

サラは僕の方を見ると、ぷつとその場で嘔き出した。それから、椅子の上で身体をくると回して、こちらに向き直ると、にやにや笑いで言つた。

「で、それをルイはどう思つてるわけ？」

「難しい質問をする。僕一人でどうこうできる話ではないから」

「どう思つてるかつて言つてんじやん。つまりはルイの考えが聞きたいわけ。二回も言わせんな」

「……はい」

サラがいきなり睨みを利かせてくるので、僕は暗黒物質に見つかつた星みたいに震え上がった。僕がサラを倒すというよりは、サラが僕を倒す気がする。

「僕は、なんで人間を襲うのか知らされてない。下つ端だから。でも、人の悲鳴が好きなわけでもないし、殺戮が趣味なわけでもない」

「あつはは、見事に否定が揃うね。やっぱ争いごとは苦手なわけか」

サラは立ち上がり、突然床板を剥いだ。地下へと続く梯子が穴の中に見える、ビツクリする。そうして彼女は、僕の三本目の触手を掴んだ。抜けそうになるからそんなに強く引っ張らないでほしい。半ば引きずられる形で、僕は床下にあつた謎のスペースに連れ

込まれた。

「それならさ、いっちょよ逃避行といこうじゃない？」

サラが小さなライトで暗闇を照らすと、そこには僕達の乗ってきたものと同じ宇宙船があった。

「いやー、乗り捨てられてたのを偶然見つけたのはラッキーだったけど、まさかエイリアンがいないと動かないなんて思わなくてさ」

着陸に失敗して、使えなくなっていたと思っていた宇宙船は、完全な形で修復されていた。

「他星人に乗っ取られたら困る。だから動かないような仕組みになっている」

「どういう仕組みなんだか……この船自体は普通の機械だったから直せたけど。変な部品とかなかったし」

サラは平然とそう言うてのけた。しかし、相当複雑な造りにはなっているはず。元から破損が少なかったのだらうか。僕はまた顔を黄色く染めた。

「あたしね、機械いじりが得意なんだよ。父さんの影響なんだけど、小さい頃から機械に触れてたから、なんか直感的に分かるんだ」

「これで、どこに行く？」

「月にある衛星都市。かつては開発が進んで、人もちらほら住みに行ってたけど、あん

たらが攻めてきてからは全員慌てて地球に戻ったよ」

「なるほど、理解した。目的地は月」

僕が目の前のもニターに向かつてそう告げると、宇宙船が唸るような音をあげてりブートした。

「音声認証?! うつは、これは滾るねー!」

サラが顔をぱあつと輝かせ、操縦桿を勝手に握る。宇宙船が段々と上昇を始め、屋根を突き破った。ぐんぐんと雲を突き破り、空を突き抜け、宇宙へと飛び出す。遠くで勝手な離脱を咎める警報音と銃撃音が聞こえたが、そんなものに僕達は止められない。日が沈むのに合わせて、光よりも速い宇宙船は月へと一直線の軌道を描いていった。

「へえ、高いところから見ると普通の都市だ……誰もいないのが不気味。ゴーストタウンってやつ?」

衛星都市に降り立った僕らは、一番地球がよく見える電波塔まで足を運んだ。僕が二本の触手をぐわんと伸ばし、また四本の触手ががちりサラを掴むと、展望台の上へと一気に登った。既に地球では、人類滅亡へのカウントダウンが始まっているはずだ。宇宙船が地球を取り囲み、虹色のビームをあちらこちらへと撃っている。緑が消えて、白へと変わっていく。その様を、僕ら二人はぼーっと眺めていた。

「なんか、ビードロでも見てる気分だよ」

サラがぼつりとそんな言葉を漏らす。ビードロはガラスという意味もあるが、おそらく彼女が言っているのは、あの星にある玩具のことだろう。

「あんなに綺麗なのに、今頃地球では人がさらっさらの砂にされてるんだ。ほんつと、バカみたい。くだらない。どうしてあたし達って、争わなきゃいけないわけ？」

「理由なんてない。僕達は、いくつもの星を滅ぼしてきたから」

「そっか……やば、なんか涙出てきた」

サラは涙でくしゃくしゃの顔になって、自分の膝を抱え込んでしまった。やっぱりその顔を見ていると、僕の胸が痛くなる。どうしてだろう。

「もうあたしの家族も、誰もいないし。地球に心残りなんてないはずなのに、いざこうやって見ると、やっぱ寂しいもんだね」

「……サラ」

気が付くと僕は、一本目の触手で彼女の涙を拭っていた。

「なに、ぬるぬるしてて擦ったいんだけど」

「僕が、サラと一緒にいる。宇宙を巡ろう。僕らを受け入れてくれる星を探すんだ」

「……それ、告白かなんかなの？」

頬を赤く染めて、彼女はくすりと笑いを漏らす。

「仕方ない。理由はその瞳に一目惚れしたから」

「好きになった理由を極めて業務的に伝えてくんない」

サラが僕の脇腹を小突いた。彼女の笑顔を見て、僕も何年かぶりの笑みを浮かべた。それはもう、にんまりと。

「あ、喉乾いたから、ここ出る前になんか買っていきたい」

「水なら船の中に備蓄があるはず。使い切つてなければ」

電波塔から降り、僕らは宇宙船を停めた場所へと戻る。誰もいない綺麗な都市は、僕が地球に初めて降り立った時の景色によく似ていた。

「そーいうことじゃなくて、これこれ」

彼女がそう言つて指を指したのは、自動販売機だった。

「この都市、ソーラーパネルで電気供給してるから、こういうジュースは冷えてるっぽくてさ。なんか開ける方法ない？ さっきの銃とかさ」

「あれを撃つたら中身ごと砂になる」

「うっげ、全然使えないなそれ」

可愛い顔をしてとんでもない悪態をつくものだ。例え外装だけ剥がせても、盗んでいるのとなんにも変わらない気がする。

「あ、やつぱりあった。これ取れない？」

と思えば、サラは販売機の下を覗き、何かを発見していた。僕も同じように覗き込む

と、そこにはきらめく銀貨が落ちていた。

「まさか拾うのか？」

「愚問でしょ、届ける交番もないんだし」

サラに睨みつけられ、僕は泫々と六番目の触手を伸ばして銀貨を取り、販売機へ挿入した。

「結構種類がある。なにを飲む」

「……あたし、サイダーがいいな」

サラがボタンを押し、ペットボトルを取り出す。蓋を開けるとぷしつという音が響いて、そのままぐいつと喉へと流した後、僕の方へとボトルを差し出してきた。

「かーっ……やっぱりしゅわつてする。飲んでみる？」

少しためらったが、おそろおそろの口へと流し込んでみた。喉がばちばち弾けて、熱いような痺れるような、不思議な感覚が広がった。

「……む。あ、舌が……っ」

「あははは！ そんな子供みたいな反応するんだ！」

初めて飲んだサイダーの味は、この出会いと共にずっと忘れない。

プリムラ・ユートピア

独りになってから、一体どれだけの時が過ぎただろうか。大体百を過ぎた頃から数えるのをやめてしまったニルには、全くもって見当が付かなかつた。ただ確かなのは、何百年経つても自分の容姿が全く変わらないのと、そんな気の遠くなるような時間を過しておきながら、訪ねてくる者が一人もいなかったことぐらいだ。木々がひしめき合う鬱蒼とした森の中、朽ち果てた一軒家の裏側にある庭が、彼の住処だった。かつてはビールで覆われていたその裏庭も、今では鉄の骨組みすら錆び付いて、その大半が折れてしまっている。長い期間をかけて風化していくそれを毎日見る度に、どうして自分の姿は変わらないのだろうか、と不思議に思うのであった。

ニルの日常は、いたって代わり映えのない日々だ。朝、小鳥の囀りで目を覚ませば庭を後にし、そばに流れている小川で水を啜って顔を洗う。白髪で碧眼の、その整った顔が波紋でゆらゆらと揺れた。そうして、そこら辺を泳いでいた小魚を何匹か握って取り、踊り食いをする。ぴちぴちとした感触がすり抜けて行って、喉越しがとてもいい。腹ごしらえを終えると、猿と木登り対決をして、木の実を分け合って食べる。森の主気取りの熊の肩を揉み、その毛皮でもふもふの膝を借りて昼寝。目覚めるともう日が傾き

かけているので、熟れた果実をいくつかむしり取ると、庭へと帰宅するのだった。こんなことをもう十万回は繰り返している。だから今日も今日とて、猿達と木登り競争に興じていた彼は、今までとは明らかに違う異変を感じ取った。

「んぐ……?」

木の上に登り、遠くの景色を眺めながら呑気に木の実を齧っていた時だった。真つ白な鳥達が大群を成して、ニルの頭上を突っ切っていった。何事だと思つた次の瞬間、青い空を切り裂いて、赤く眩い光が落ちてきたではないか。何百年も生きてきた結果、あらゆることに凶太くなった彼でも、予想外の事態に呆気にとられた。赤い光は尾を引いて、そのまま地上へひゆるひゆると落下していく。そして重く低いぞおんという音が響くと、木々が忙しくわさわさと揺れたので、ニルは咄嗟に木にしがみついた。

(隕石……?)

木の実を齧り齧り、彼はそのようなことを考える。とりあえずは様子を見ておかないとならないと思い、木からするりと降りた。猿に別れを告げ、生い茂った草を掻き分けつつ、何百年ぶりかの事件に少しだけ胸を踊らせた。

「あーあ、なんでこうなっちゃったかなあ……」

ステラ・ヘクセラは誰に言うでもなく、ウンザリしたトーンでぼつりと呟いた。ちよつとした家出のつもりが、見たこともない惑星に不時着してしまつたのだから無理

もない。彼女が乗っていた一人用の宇宙船は、墜落の影響であちこちが故障してしまい、すぐにこの星から離脱できる状態ではなかった。

「お母様に助けてつて言うのも面目が立たないし、大体こつてどこなの……？」

宇宙船のパネルにはノーシグナルの文字がゆっくり点滅するのみで、ステラの現在地を表してはくれない。リーダーも墜落で故障しちゃったかな、と彼女は首を捻った。どこにいるのかが分からないとなると、救難信号を送つて待つ他にやることはない。ステラは途方に暮れると同時に、少し安心もしていた。これなら暫くの内は忌々しい怒号からも解放される。一週間経つたら戻る気ではいたが、今頃父親が必死の形相になって自分を捜していると考えると、少し愉快な気分にもなった。

「つて、よくよく考えたら一週間分の食料しかないのが問題か。自然があるつてことは、外での活動もできる、よね」

ステラはコックピットの窓から外を覗く。真つ青に晴れ渡つた空を背景にして、白い鳥が飛んでいるのが見えた。どうやら酸素がありそうだ。どちらにせよ、ここに閉じこもつていても埒が明かないと考えたステラは、意を決し外に出てみることにした。出入口のハンドルを回し、周りを警戒しながらそつと扉を開ける。宇宙船が墜落したことによつて木が倒され、辺りの地面が窪んでいたが、それ以外の異常はない。ゆつくりと深呼吸し、特に息苦しさを感しないことを確認すると、ひとつ大きく伸びをした。

「んーっ。とりあえず、損傷がないか見ておこうかな」

まずは宇宙船の点検を始めようと、ステラは機体の裏側へと歩みを進めようとした。しかし、そこには自分と大して変わらない年齢に見える少年がいたのだ。彼はその場にしゃがみこみ、熱心な眼差しでステラの宇宙船を眺めていた。

「……へっ?」

想像の右斜め上を行く事象に、ステラは生まれてこの方出したこともないような、腑抜けた声をあげた。そうして、その声でこちらに気付いた少年と、ステラの目が合う。

「えっ、あの、君は……?」

少年はステラを見るや否や、目玉が落ちてしまうのではないかと言うほど、驚いたように目を見開いた。一方ステラも、知らない惑星で人間に遭遇するとは思っておらず、伝わるかも分からないというのに、うっかり母国語で話しかけてしまった。

「ッ!」

少年はあわあわと身振り手振りで何かを伝えようとした後、一気に青ざめてステラから一目散に逃げていった。

「え、あつ、ちよつと! 待ってよ!」

ステラも走って追いかけようとするが、相手はこの森の中に住む野生児。瞬く間に距離は拡がり、ステラ側から彼の姿はすぐさま見えなくなってしまう。

「何、どういふことなの……?」

ステラは唾然としたまま、謎の少年が消えた森を見つめていた。

「に、人間、だ。なんでここに、来たんだろう……」

ニルはすつかり、人類は絶滅したものだと思っていた。大きい熊の膝を借りながら、ぼーつと過去の回想に耽る。始まりは、遠い昔のことだ。

彼がまだ幼い頃——と言っても、容姿は今とさほど変わらないが——この星にもたくさん的人类が住んでいた。そして、彼もそのまた一人だった。しかし、星の資源が底を尽き、環境問題が段々と危機的なものになり、各国の関係が険悪になっていった。そうして、人類は本格的な殺し合いを始めた。弱肉強食、敗者は滅びゆく定めだと言わんばかりに、限りある安全地帯を巡って命懸けの椅子取り合戦。その中で、ニルもとある研究所に招集された。国のお偉いさんが言うには、少年達をとてすごい兵器にし、他国を討ち滅ぼす……そういう内容の作戦だった。当時のニルにはよく理解できなかったが、そういう経緯で、彼は人間ではなく、人間の格好をした兵器に生まれ変わったのだ。

しかし、他の少年達には見られなかった力が、ニルだけに発現することになる。彼は改造手術が終わった直後、五秒で自分を兵器にした白衣の男を殺した。それと同時に、自分の身体の中へ鈍い痛みと共に何かが入ってきたのを感じる。彼は文字通り男の命を奪い、自分のものとしたのだ。この時点で、ニルの寿命は百五十年近いことになる。

しかし、当時のニルはその事実を知る由もなく、研究所のあらゆる人に助けを求めて帰ろうとした。そうしてできあがったのは、白衣を着た死体の山と、三千五百年ほどに延びたニルの寿命だった。だが、それだけでは終わらない。命からがら逃げ出した研究者の一人が、お偉いさんにとんでもない少年が現れたと報告してしまった。元々兵器にされるはずだったニルのことだから、身体もとても頑丈で、その上に大体五十人分の命まで持っている。誰だつてこれに食いつかない手はない。すぐさま実戦へ投入され、戦場で撃たれてもまた起き上がる彼の姿は、さながらパニック映画に出てくるゾンビのようだった。それが命を奪えば奪うほど強固になっていくわけだから、かなりの数の国と兵士が恐れおののき、白旗を挙げた。それをしたところで、彼の近くにいれば命を吸い取られてしまうのだから何の意味もなさなかったが。そうして戦争が終わり、ニルのいた国は勝者になった。しかし、その時点で人類は絶滅寸前。そして彼もその能力を恐れられ、今住んでいる森の中に幽閉された——これが事の顛末である。それから何百年もの間、彼は人間と顔を合わせることはなかった。けれど、それでいい。ニルだつて人の命を奪いたくはない。もちろん研究所に呼ばれたのだから、自分の意志ではなかった。先程だつて、宇宙船の中から生きている人が出てくるなんて、思わなかったのだから。

「あーっ！ こんなどころにいた！」

森の中でも大きく響く高い声に、過去を思い出していたニルはびくりと肩を震わせ

た。声のした方にきつと視線を向けると、そこには宇宙船から出てきた少女がこちらを指差して立っていた。綺麗な赤髪に端正な顔立ちで、赤色のポシエツトを肩から提げ、真つ白なブラウスと茶色のコルセットスカートという、鬱蒼とした森には全く似合わない容姿をしている。ニルは毛皮を服代わりに着込んでいるだけなので、まるで原始人と未来人が邂逅したような滑稽な絵面がそこに生まれた。

「わわっ、ちよつとストップ。聞きたいことがあるから——」

ニルはまた背を向けて逃げ出そうとしたが、少女が大声でそれを止めた。恐る恐る振り向くニルに、少女は一步を踏み出した。

「ち……近寄らないで、危ない」

ニルは慌てて自分の右手を前に突き出し、これ以上進むな、のサインを出した。ニルは今までの経験から、どれだけ近付いたらその人の命を吸ってしまうかというのが感覚的に分かっている。いきなり出てきた少女に驚き咄嗟に逃げたのは、彼女をこんな場所で死なせないために他ならなかった。

一方少女は、自分の発した言葉が翻訳機を介さずとも伝わったことに少しだけ驚きながらも、そんな彼へ向かって慎重に会話を続ける。

「危ないって——なんで？ その後ろにいる熊のこと？」

「違う、僕が、危ない」

「全然危険人物に見えないんだけどな……」

少女がそう言うのも無理はなく、ニルの容姿は彼女の星にいた男子達とそう変わらなかった。頬に埋め込まれている、機械のチップが集まったような鱗を除けばだが。しかしこれこそが、兵器であるニルと人間とを見分ける目印であり、彼もこの鱗を、内心では忌々しいものだと思っていた。

「むー……分かったよ、近づかない。でも、質問はしてもいいよね？」

ニルの真剣な表情からただならぬ事情を察したのか、少女は本意そうながらもその場で立ち止まった。とりあえず距離を取れた安心からか、ニルは何度もこくこくと頷いた。

「私はステラ・ヘクセラ。君の名前は？」

「……ニル」

「え、なにか他にないの？ それともニが名前でルが名字？」

「違う。名字はあったかもしれない。けど、忘れた。ニルが名前」

「ええーつと……親御さんは？」

「多分もういない。どこの誰か分からないから、確かめようもない」

「どうしてこんなところにいるの？」

「ずっと昔から、ここに住んでいる」

最後の答えはステラを大いに驚かせた。こんな、人が誰も住んでない星で、一人で生きてきたの？ 昔からとは言ったが、ステラの目にはニルが自分ときほど年齢が変わらない少年に映るので、余計に混乱してしまった。

「うーん……つまりはこの星の原住民？ 君以外の人はどこにもいないんだけど」

「長い間、誰とも会ってない」

「この森に一人つてこと?! あーつ、ますますワケ分かんなくなってきた!」

ステラはつい先週こつそり見たサバイバル映画を思い出した。もつとも、主人公は目の前の貧弱そうな少年ではなく、屈強なマツチヨの男であつたから、ますますニルへの疑問が積もっていく。ステラ的には、うっかりスペースデブリに追突して、自分みたくこの星に不時着したと言ってくれた方がありがたかつた。意思疎通できるのは不幸中の幸いだが、彼女として人の子なので理解の範疇を超えてしまうことはある。よくよく思索して、ステラは一つの結論を導き出した。

「うーん、できれば、君の家に案内してくれない？ 実は今日の私、行くところないんだよね。この星に観光目的で来たわけじゃなくて」

一人ぼっちの子を、このまま放っておけない。その気持ちに彼に悟られないように、苦笑いをつしてステラはそう言った。ニルはしばらく迷っていたが、彼も女の子を森に一人で居させるのはかなり心が痛んだので、

「……分かった。こつちにある、ついてきて」

と、若干渋々と答えた。くるりと反転し、森の中を住処に向けて迷いのない足取りで歩んでいく。後ろに着いてくるステラが、感嘆の声を上げながら見たことのない機械を木や猿たちに向けていたが、理由を聞くと、

「私の星、野生の動植物ってあんまりなくて、大抵は人の管理下にあるんだよね。建物もほぼ機械で構成されてるし」

ニルにとつてはちよつぱり寂しい答えが返ってきた。一人ぼっちの彼にとつては、この森に住まう生命たちが家族みたいなところがあつたから。ニルには機械だらけの星は想像がつかない。はるか昔でも、この星の全土がロボットとビルディングで占められることはなかつた。

「それは、いいこと?」

「発展してるって思えばいいことかもしれないけど。でも、私はあんまり好きじゃないな、私の世界」

「む……色々ありそう」

「そんなに含んだ言い方、してるつもりないんだけどなあ」

ステラはくすりと笑つて、ニルの追及をかわした。彼はむつとして何か言葉を継ぎ足そうと思つたが、そこで見慣れた廃屋が出てきたのでやめることにした。

「え、これが家……?」

「違う。この裏」

きよとんとした反応のステラもお構いなしに、ニルはいつも通りすたすたと家の裏手に回る。そうして後を付いて行ったステラが見たのは、幻想的な風景の庭園だった。見たことのない植物が生い茂り、ひらひらと白い蝶がそこかしこで舞っている。ニルが他の生き物も住みやすいようにと、努力して手入れしていた結果だ。ステラは思わず感嘆のため息を漏らした。

「うわあ……ここに住んでるの?」

「寝て起きてるだけって方が正しい。いつもは一日、ほとんど森の中」

「なるほどね。これなら寂しくないわけだ」

「でも、こうして人と話したのは久しぶり。けっこう、嬉しい」

ニルはにへりと柔らかい笑みを浮かべた。兵器として恐れられていた彼は、改造されてからというものの、作戦の事務的な命令しか伝えられてこなかった。人と近づけないため、特殊な無線機で。動物たちと遊ぶのは楽しいけれど、ステラとの会話はそれ以上の感動がある。ニルはそのまま芝生に寝転んだ。

「ふふ、そっか。私もこうやって普通に話すのは久しぶり。ニルほどじゃないんだろうけど」

「……ステラも、ひとり?」

ニルが顔だけ起こしてそう聞くと、ステラはその仕草を見てくすつと笑った。

「ううん、両親がいるから一人じゃないけど。私、小さい頃から厳しく育てられてきたから」

「むむ、なんだか息苦しそう」

「苦しかった。決められた道を完璧に進むようにされていて、家の名前に相応しい子になれって言われて。特にお父様は怖かったな」

「大変じゃ、ない?」

「うん、すごく大変。期待には応えなきゃいけないし、他の年頃の女の子みたいに自由に遊ぶことだってできない。いつだって、私は籠の中の鳥だった」

「だからステラは、ステラの世界が嫌い」

「うん。発展するために進むのは素晴らしいことだけど。これが本当に正しいのか、まだ今の私には分からない」

「ここまで育ててもらってにおいて自分勝手かもしれないけどね、とステラはそう付け加え、ニルと同じように芝生に寝転ぶ。

「空、高くて青くて、綺麗だなあ……」

「夜になると、もつとすごい。星がたくさん見えるから」

「へえ、いいこと聞いちやった。端末のバッテリー残しとかないと。見える星空も私のところと全然違うだろうし」

「空がよく見える場所、知ってる。……行く?」

「えっ、いいの!?! 行きたい!」

ステラはガバツと上体を起こして、ニルの方を期待の眼差しで見つめる。ニルもその反応が満更でもないのか、にぱつと満足気な笑みを浮かべた。

「よし、決まり。……その服装、ひらひらして動きづらそう。平気?」

「うーん、多分大丈夫でしょ。ご心配なく」

先に立ち上がったニルに、服に付いた草もそのままステラも続く。空のよく見える、開けた場所——森の中にある小高い丘を目指して、二人は裏庭を後にした。

「ニルーっ、まだ着かないの……?」

「まだ。ステラ、思ったより体力がない」

「それを言わないでよー! 仕方ないでしょ、本当に家から出ないんだし」

草木を掻き分けてずんずん進んでいくニルに、ステラはかなりの遅れをとっていた。一切足を止めず、道なき道を進んでいくその姿に、感心するやらもう少し休んでほしいやらで、複雑な気分だった。

「ねえ、ここが森のどこかって分かるの?」

「変なことを聞く。ずっと住んでいるから、覚えなわけがない」

「いやいや、覚えるってレベルの広さじゃないでしょこれ……私にはどこまで続いても分かんないよ」

彼が恐らくできるだけ短めの道のりを選んでいることは分かるのだが、ステラにとってはどれだけ歩いていても景色が変わらないように思える。おまけに彼女は革靴を履いており、それが更に歩きづらさを倍増させていた。舗装のされていない地面の、泥がべたべたと張り付いて鬱陶しい。ステラは足を少し乱暴にあげて、そして、強めに地面につきこうとした時だった。ニルを追うのに必死になっていたステラの目線が、今の足元が切り立った崖の上だということに気付かず、ずるりと足場を踏み外した。

「きゃ……っ!？」

ぬかるんだ地面がステラの左足を取り、横へと滑る。高所だからといって柵があるわけもなく、重心がぐらりと左に傾き、右足で踏ん張ることもできなかつた彼女の身体が宙に投げ出された。

「……あぶない!」

ステラは何か掴めないかと慌てて右腕を伸ばす。次の瞬間、素早い動きで戻ってきたニルが、身を乗り出してその手首を握った。『とてもすごい兵器』の彼は、反射神経もその場の判断力もずば抜けている。それは何百年経とうと、変わらないことだった。しか

し――

(痛く、ない? どうして、そんなことが……)

——人に近づき命を吸い取る時の、あの鈍い痛みがなかった。ましてや、直接触っているというのに、何故? 駄目だ。ニルは頭をぶんぶんと振り、目の前の宙ぶらりんの少女を助けることに集中しようとした。どんな理由にせよ、ステラの命を奪わないのなら、落ち着いて助けることができる。右腕に力を入れ、左手で踏ん張り、ステラの身体をぐいっと引き上げた。

「ケガ、してない?」

「大丈夫、助けてくれてありがとう……そ、それより、近づいちゃって大丈夫だったの?」
ステラが慌てたようにそう聞くと、ニルはどうすればいいのか困ってしまった。今まで彼に近づいた者は五秒として持たなかったのに、ステラは彼の隣にいても平然としている。距離を取ることも忘れて、ニルはただ呆然とするしかなかった。

「分からない。こんなこと、今までになかった」

「……ううん、そっか。そうだよね」

ステラは立ち上がると、ニルに手を差し伸べた。ニルは驚きと困惑の入り交じった表情でその手を見つめたが、そっと手を取った。彼の記憶に誰かと手を繋いだ経験はない。初めての温もりを、しっかりと味わった。

「この上に着いたら、私と、私の国のことを話すよ。今度はきちんとしていくから、もう一回案内して?」

ステラ・ヘクセラは、とある国の王女として生まれた。ニルからは想像できないほどの、機械だらけの星の国。全ての環境を人の管理下に置かなければならぬと、建国者が唱えたとされている。資源不足による過酷な戦争を乗り越え、命からがら今の星へと逃げ出したその経験から作られたと彼女の父は言っていた。どんな人でも最初から決まった安定した道を進めるように、国の方から将来を決めるのだ。そうすることによって、国家の体制は盤石なものとなるし、貧困に苦しむ者も生まれない。

「つて、お父様は思っているみたいなんだけどね」

「……すごい。整ってる。争うこともなさそう」

二人が丘の頂上に到着したのは、日が西へと沈みかけた頃だった。涼しい風がステラの髪の間を通り抜け、どこからかセミの鳴き声が聞こえる。

「でも、私はそうじゃないつてことを、昔から知ってたの」

ステラには王女という称号以外にも、周りの人と違うところがあった。彼女は特殊能力を持っていたのだ。これに目覚めること自体は、ステラの星では珍しくない。遠い過去の人類が覚醒してから、その血筋を受け継ぐ者に発現するということは多々ある話だ。つまり、問題はこういう能力かという方にある。彼女の力は『人の思考を読み取

ることができる』というものだった。それも、周りにいる人間の心を無作為に読み取ってしまうから、両親は頭を悩ませた。一般的に歳を重ねれば能力自体は消えていくものだと言われているが、彼女の王女という立場上、それまで部屋の中でずっと過ごしているわけにもいかない。

「お父様は私に能力の制御を命じたの。説明は難しいんだけど、能力専門の先生まで呼んで、かなり辛い訓練を積んだ。でも、どうしても上手くいかなくて、ある日こっそり家を抜け出した」

外の世界で彼女が聞いたのは、今の暮らしに対する人々の不満だった。本当は自分の夢があるのに、それを潰されて決められた人生を歩む。しかし、死ぬことはないから、文句を言おうにも言えない——そんな、もやもやとした不満だ。ステラはそれまで、父の統制が完璧なものだと思っていた。誰も困ることがない、それこそ理想的な国だと。「シヨックだったの。皆、きちんとした未来が守られてるのに、なんで不満なんだろうって思った」

途方に暮れて、ステラは王都の郊外まで一人で歩いて泣いた。うずくまっていた彼女を捜しに来たのは、能力の制御の方法を特訓していた先生だった。

『どうして泣いているんだい、ステラ』

ステラと目を合わせるように屈んだ先生は、綺麗な黒髪と吸いこまれそうな真っ黒な

瞳で、彼女の国では余り見かけない風貌だった。最初に出会った時はそれを不気味だと感じていたステラだが、多忙な両親に代わって彼女を見ていた先生は、ステラのことを何よりも考えてくれていた。

『んん……悲しくなっちゃって、泣いてたの』

ステラは、自分の能力で他人の心の中を覗いてしまったこと、そこにあった不満の種のことを先生に話した。自分はどうすればいいのか全く分からない。能力の制御もまだ上手くいっていなかったことも重なり、彼女の目からは次から次へと涙が溢れていた。

『そうか、私も家庭教師としてまだまだだなあ』

ふう、とため息を漏らして、先生はステラの頭を優しく撫でた。いつもは厳しい先生だったが、時折見せる優しさこそが彼女の本当の姿であることを、ステラは前から知っていた。

『ステラ。自分の置かれている毎日が、窮屈だっと思ってたことはない？』

王家の子として育てられたステラは、幼い頃から厳しい指導を受けてきた。礼儀や作法、正しい身だしなみ。それに加えて、能力に目覚めてからはその特訓までしてきた。しかし、それ以前に彼女は年頃の女の子だ。普通の女の子に憧れることもあった。

『……ある、けど。わたし、お姫様だから。がんばらないと、いけないの』

『君は偉い子だよ、本当に。でもね、そうして自分を殺していたら、いつかダメになる。自分に正直に生きなさい。違うって思ったことには、きちんとノーが言えるようになりなさい』

『正直に……?』

『ああ。みんな一緒なんだ、この国は。でも、誰もが自分を押し殺している。でも、ステラなら変えられるよ。そう思ったから、私は君の先生になったんだ』

『わたしが、変えるの……?』

『そうともさ。だから、一旦涙は拭いて、未来のために備えよう。明日からまた特訓だ』
先生はステラの手をぎゅつと握り、目を合わせて呟いた。

『私はステラを、君の可能性を信じているよ』

「正直、なんで期待されたのか分からなかった。私、王女としてはダメダメなんだ。ここにいるのだから、お父様は皆のことが分かってない、なんて大喧嘩して星を無理やり飛び出してきたからだし」

先生はステラの能力を『人と触れた時に思考が読める』程度まで落ち着けると、短い手紙とある花を残して彼女の元を去ってしまった。

「でも、ようやく気付いた。私は、私達は、ただ自由を知らなかっただけだったってことが」

日が森の向こうへと沈み、朱色が引いていく空へ藍色がじわりと滲み出す。輝く満天の星の下で、ステラはぶら下げていたポシエツトから一輪の花を取り出した。ニルもそれをじつと興味深そうに覗き込み、聞いた。

「……それは？」

「先生が私に残した、プリムラってお花。この経験が、いつか君の糧になる日が来ますように、って」

紫色の花弁が、夜の色に溶けていく。ステラは、過去を懐かしむようにそつと目を細めた。

「さつき手を握った時に、君の記憶を見たよ、ニル。本当にずっとひとりだったんだね」

「……うん」

「でも、それ以上に君は、楽しそうだった」

「たしかに、森のみんなと遊ぶのは、楽しい」

ステラは寝転び、プリムラを空に掲げた。ようやく、先生の言っていたことを理解した。きつと彼女は最初から、本当の幸せを知っていたのだ。

「人の未来とか自由とか、そういうものは誰にも決められないんだ。やっと分かった」

兵器としての使命を果たしていた頃のニルと、今のニルはまるで別人だ。人を殺めるのは、彼の望んだことではなかった。しかし、彼を縛るものはいなくなり、今では自由

な人生を謳歌している。傍から見れば永遠に続く悲しいものかもしれないが、それでも彼自身にとっては楽しい日々に変わりはない。

「今の私とみんなも、過去のニルと一緒にだろうな。物騒なことは一切ないけど、人から与えられた役目を果たすだけじゃ、不満だよね」

「それは、あたりまえのことだと思う」

「私達はずっとそれを続けてきちゃったからなあ……理想の世界とは真逆に行ってるのに、それが普通なんだって信じてた」

それに気付けるのは、他人の心が読めるステラしかない。そして、彼女自身が正直にならなければ、運命は開けない——先生は一体どこまで見通していたのだろうと、ステラは小さく感嘆のため息をついた。

「私、自分の星に帰るよ。きちんとお父様と仲直りして、明日のことを考える。王女の位は外せないけど、皆の未来を決める国から、皆の未来に寄り添う国にしてみせる」

「ステラ、なんだかかっこいい」

「えへへ、そうかなあ？ ふふ、褒められるとやっぱり嬉しいな」

ステラは照れ臭そうに頬を赤く染めて、微笑する。それから、ニルにそつとプリムラを差し出した。ニルは驚いて目を丸くし、ステラの顔を凝視する。

「これ、預かっててくれないかな」

「で、でも、これはステラの大切なもの……」

「だーかーら！ 預かって言って言ってるでしょ。私、女王様になって、皆が笑える理想の国を作ったら、この星にニルを迎えに来る」

「え、でも、みんな、ちかづいたら危ない……」

「大丈夫。私の先生みたいな能力専門の研究者はいるし、そうでなくとも、能力は歳を取る度に消えていくっていうのが通説だから。実際、私が隣にいてもなんともないでしょ？」

「……それは、そうだけど」

「ま、決定権はニルにあるよ。動物たちと遊ぶのが楽しいなら、ここにずっと残るのも一つの手だと思うし。でも、私と話せて嬉しいって言ってくれたから」

ニルは迷ってしまった。この森も好きだし、ステラの星も気になる。それに、人を傷つけることがないなら、一人で過ごす必要もないのだ。

「……分かった。ぷりむら、預かっつく」

その返答に、ステラはぱあつと顔を輝かせた。ここまで心から笑ったのはいつぶりだっただろう。小さい頃から厳しく育てられたステラには、全く見当がつかなかった。

「ありがとう、ニル。私、めげずに頑張るから。それとね、言いたいことがあるんだけど

――」

ステラはニルの顔を見つめて、柔らかく微笑んで言った。

「——ニルの顔、すごく綺麗だよ。空に浮かぶどの星にも負けないぐらい、輝いてる」
満天の星空の下、静かな惑星で、思いの通じ合った二人はそつと肩を重ねる。それから夜が明けるまで、楽しい話でひとしきり笑い合った。

青空の向こうから、昨日と同じような赤い光がゆつくり落ちてくるのを、ニルは涙を堪えながら眺めていた。ステラと繋いだ手を、ぎゅつと握りしめる。

「ニル、もしかして泣いてる？」

「泣いてない、まだ」

「ふふ、まだかあ。大丈夫だよ、永遠のお別れじゃない。立派な女王様になって、また君に会いにくるから。私が理想とする世界にしてみせるよ」

「……約束した」

「うん、私は約束を破る主義じゃないもん。お父様ともちゃんと向き合って、自分の気持ちをちゃんと伝える」

赤い光は地上に近づくにつれて、段々とその輝きを増している。木に囲まれているなかつた丘の上が通信を受けるには好環境だったらしく、大喜びで写真を撮っていたステラは、父親からの怒涛のメッセージに冷や汗をかいた。帰ると言ったところで自分の宇宙船が壊れているのだから、ステラにとって迎えが来るのは嬉しい話ではあったが。

「あーあ、お父様にこっぴどく叱られるだろうなあ。数日は引つ張りそう……」
「だいじょうぶ。ここから応援してる」

ニルはステラの手を気に入ったらしく、何回も握り直してきた。ステラも、その手をきつちり握り返す。

「うん、そうだね。本当にありがとう、私に当たり前を気付かせてくれて。いつか絶対恩返しするから!」

宇宙船が地上へ着陸し、入口が自動で開いた。ステラはニルの頭をほんとひと撫ですると、手を振りながら宇宙船へと乗り込んでいった。

「じゃあ、また会おうね、ニル!」

入口が閉まり、宇宙船が浮上を始める。堪えていた涙が、永遠の別れではないと知っ
ていても、瞳から勝手に落ちていった。

「ステラ、またね……!」

森のどの動物にも負けないような声で、彼は叫んだ。船の窓から見えるように、手
いっぱい振った。宇宙船が遠くの空に消えて、見えなくなるまで、ずっと。

へ二次創作・小咄〉アンノウン・デイザイア

——夜は嫌いだ。

誰もいない病室で過ごす夜なら、尚更。心の中で渦巻く靄が、胸をはち切れんばかりに圧迫して苦しくなる。理由はよく分からない。後悔と言われればそうかもしれないし、不安と言われても僕は頷くだろう。

寝苦しくなつて目を覚ませば、もう見慣れてしまった病室の天井が視界に映った。夢見はもう長いこと悪い。自分を覆い尽くそうとする影の夢。正体はとつくのとうにかつていいる。目を逸らしたいのに、逸らせない。日中起きている間ならば、まだ他のことに意識を向けられるけれども、悪夢を見たあとの真夜中となるとそうはいかなかつた。

(……悪夢なんて言うのも、失礼な話だな)

別に、あの人が悪いわけじゃない。今の僕がこうなっていることだって、彼は知らずに過ごしているだろう。悪いのは、迫られた時に受け入れてしまった僕だ。向こうを原因みたいに責めるのはお門違いだった。

(分かつてはいる、けど)

あの夜のことは今でも鮮烈に焼き付いている。誘いを断れずに部屋に連れて行かれて、その適当な態度のまま口付けを交わした。少し乾いた唇を押し付けられ、スポーツマン特有の逞しい腕で身体を弄られて、それからは……。他人と交わったのは、あれが最初で最後だった。こんな身体になってしまったのだし、それ自体はもう揺るぎのない事実だろう。

結果として僕はHIVに感染し、そこから合併症で入院することになった。一回だけで相当運が悪いとは思ったが、たかが一回されど一回ということなのか。彼側が相当プレイボーイな様だったし、どこかの誰かから貰ってきたら……。そんなことを、もう何百回と考えてしまっている。そんなことをしたところで、どうにもならないことは分かっている。だが、考えていないと、自己嫌悪で胸が押し潰されそうになるのも、また一つの事実だった。

ごろりと寝返りを打つ。病気自体はまだそこまで酷くはない。……。けれども、免疫がダメになって以上、他の合併症を引き起こす可能性だつてある。未来に希望なんて持てはしなかった。そうしてまた、眠れないまま夜が明ける。

「はあ……」

「どうしたんだよ。具合でも悪いか、ブレット？」

「具合が年中悪い僕にその質問はおかしくないかな」

時計の針は丁度午後二時ぐらいを指している。今日は面会があった。幼馴染みのボブで、僕のことを理解してくれている数少ない人物だ。ブロンドカラーの髪に、ちよつとぼつちやりした体型。幼い頃から細くて、病気になつてから更に細くなつた僕とは正反対だ。

「あははつ、悪い。……また眠れなかつたのか」

「ここ数日特にね。どうせベッドにいるだけなんだし、ボブが帰つたら多分寝る」
「つたく、俺が来るからつてそんな気を遣わなくてもいいんだけどなあ」

彼が笑うと、元々あまり見開かれていない目が更に細くなつた。教室で普通に過ごしていても、先生から寝ているのかと怒られるぐらい細目だ。笑つた顔は素敵だし、性格もほぼ難点がない。居心地がよかつたから、小学生の頃からずっと一緒にいる。今もこうして、病院に来てくれる。ほとんど着替えを置いていくだけの家族よりも、彼と話す時間の方が僕にとっては暖かかつた。

「……ブレット？　おーい、ブレット？」

「つ!?　……ごめん、ポーつとしてた」

「おいおい、大丈夫かよ。俺そろそろ帰るから、ゆっくり休んだ方がいいぜ」

「あ……うん、分かつた」

椅子から立ち上がり、ボブがいそいそと帰り支度を始めた。引き留めようとも思つた

が、彼の心配を無視するわけにもいかない。

「じゃあな、また来週にでも来るからさ、元気でやっつけよ」

「だから、今の僕にそれを言うのは変でしょ」

「あははっ、あくまで心意気だつて。弱気になつたら終わりだからな」

手を振りながら、彼は病室のドアを閉めた。急に病室が静かになる。テレビが置かれているけれども、僕は普段からそれをあまり見ていない。

「……あの鈍感男が」

ボブには感謝している。が、どうにも彼には鈍いところがある。僕が踏み出せない一步を、彼の方から歩んでくれるということはまずない。僕が……同性にも恋愛感情を抱くということを知っていながら、自分はその対象に入っていないと思っ
ているらしい。

彼は誰にでも優しい。クラスの中心にいつも立っており、僕はそんな彼にいつもついていった。ボブの隣にいればまず間違いは起きなかつたし、彼も僕のことを親友と思ってくれている。それから大学に進んで、少しお互いの連絡が途切れた時に、僕はうっかりレールを踏み外したのだ。僕がずっとボブのそばにいたのなら、こんな過ちも犯さなかつたはずだ。今頃幸せに家でスナック菓子でも頬張っていたことだろう。しかし、ボブは僕がこんな風になつても見放さない、いいやつだ。

「……どうして、僕なんかに構うんだろうな」

彼が消えていったドアの方を見て、僕はほつりと呟いた。ボブは僕と違ってバイセクシャルではない。本人の口からそんな言葉が出た試しはないし、高校の頃に僕が自分の性質を告白した時も、

『まあ、いいんじゃないか？　好きになるやつが男でも女でも、好きって気持ちは変わらないだろ。な？』

と、平然と言い放った。普通、もつと引かれてもいい話だ。小さい頃から自分の隣にいたやつが、実は男も好きになるやつだった！　なんて話、自分でしていても正直気味が悪い。僕が自分の心を理解し始めたのは中学生も終わる頃になってからで、自分でもこの感情をどう扱っていいものか悩んだのだから。

頭のコートを掻き毟る。なんて哀れなのだろう。結局僕は、このままベッドの上で死に行く運命だ。これ以上、ボブの人生にブレットが関わる必要はない気がしていた。ため息を吐こうとして咳き込む。喉に痛みを感じて、口の中に生暖かい何か広がった。嫌な予感がして、ティッシュを手に取り、何かを吐き出す。口から離すと、そこには真っ赤な血が点々と染み込んでいた。

「おーっす、ブレット。今日はまた一段と元気が無いように見えるんだが、どうした？」

「……別に、どうもこうもしてないよ」

「の割にはいつもより暗い面をしてるんだけどなあ。お、そうだそうだ」

一週間後、僕の病室にまた顔を出したと思ったら、ボブは開口一番にそう告げた。そういうところは核心を突いてくる癖に、肝心なところには気がついてないから、腹が立つ。僕はボブが真横でバッグを漁っているのを横目に、先週のことをぼんやりと思いつく。あの後すぐ看護師を呼び、診察をした。担当医の話だと、吐血しているのはどうやら内蔵に肉腫ができてきているということだった。投薬しても効果に關しての望みは薄いというのでも聞かされていた。そして、近いうちに身体中に転移するということも。つまり、それは――。

「ほら、見てみろよこの記事！」

ボブが取り出したのはありがちなゴシップ誌だった。日付は少し古めのもの。いつたい家のどこに積まれていたんだらうか、少し乱暴にホコリが拭いてあった。

「へえ、ボブでもそういう本読むんだ」

「うんにや、俺はあんまりだな。母ちゃんがこういう雑誌好きなんだよ」

「ああ……なるほどね」

「んな事はどうでもいいんだよ、ほら」

彼が指さした記事には『フレディ・マーキュリー、ファンに真実を！』とそれっぽい大袈裟な見出しが付けられていた。こちらを睨みつけるような、眼光の鋭い彼の写真が

載っていた。音楽にさほど詳しくない僕でも、さすがにフレディ・マーキュリーぐらいは知っている。QUEENのボーカルだ。ボブはQUEENの熱烈なファンで、前にもライブの一体感が凄いと、掛け声があるんだとか、熱心に話していた。

「で、君の大好きなその人が豪遊してたから、なんだって？」

「最初の見出しだけ見て俺の涙ぐましい努力をスルーするなよな。重要なのはこつちだって」

「フレディ・マーキュリー、同性愛の真相、か。……本人、肯定してないんだよね？」

「まあ、そうだけどき。近しい人のカミングアウト番組もやってみたんだし、ほぼ本当だって。ブレットみたいな人達に対する、世間からの冷やかな目ってあるだろ？」

「そりゃ、ないって言ったら嘘になるね」

「でもほら、あんなドテカいバンドのボーカルだってそうなんだからさ……」

ああ、なるほど。ボブがわざわざこんな冊子を持ってきた理由がわかった。彼はどうかやら僕が落ち込んでいる理由を、同性愛そのものに対してだと思っっているらしい。勿論、僕にだってそういう時期もあつたけれど。もう、そういう問題じゃないんだ。ボブの話を遮って、僕は言った。

「ごめん、具合が悪い。今日は帰ってほしい」

「え？ お、おう。なんか悪いな、いきなり」

「いいよ、言いたいことは分かったから。それに、あんまり頻繁に来なくなつていい。ボブだつてわざわざ来るの、大変だろうし」

「ブレット……」

「……おやすみ」

ボブがいる方向とは真逆の、窓際へと向いて布団を被る。さすがにこの行動で彼も諦めたのか、ため息を一つ吐き、

「分かったよ。これ置いておくから、暇な時に読めよ」

と言つて片付けを始め、間もなく扉の閉まる音がした。

最悪だ。何もかも失つた気分だ。ボブですらもこの悩みを分かってくれないのなら、僕のことを理解してくれる人は果たしてこの世にいるのだろうか。太陽は病室を照らしているのに、僕の心だけが凍えている。ボブへの思いが、どうしようもない現状が、全部マイナスの感情へと置換される。死にたくなつても、死ぬ勇気すら僕は持つていない。昔から、誰かに決断を任せることしかできない臆病者だった。

病院の白い無機質な廊下に、穏やかな陽の光が射し込んでいた。あれからというものの、身体に出た肉腫は増えるばかりだ。もう人前で半袖の服も着たくはない。少し暑くなり、誰も来ないのを確認してから、デニムジャケットの袖を少しだけ捲ると、右腕にも大きなホクロのようなものがあるのが分かった。首や額にあるものはもう隠しよう

がない。ボブはあれ以来姿を見せないが、次会った時にはきつと病状が進行しているのがバレてしまっだろう。

「……あるのかな、次」

自分の痩せ細った頬を撫でる。いよいよ、もう後がなくなつた。特にやり残したことはないはずだ。僕の人生なんて、最初から誰かの後をこそこそついていくようなものだった。生まれて来なければ良かったときえ思うぐらいだ。誰かを本気で愛したこと、愛されたこともなかった。

「……僕って、なんだっただらうな」

僕が呟くのと同時に、キィイ、と扉の開く音がした。僕しかいなかった廊下に重そうな足音が響く。

（ああ。きつとこの人も、僕と同じ患者なんだ）

僕は俯いた姿勢のまま、自分の前を通つて出口に向かう男へと視線を向けた。

すらりと長い脚。鼻の下に印象的な髭。サングラスとカーキ色の帽子を着用して、まるで見られたくないと言わんばかりに顔を隠しているようで――

（……いや、待つてくれよ）

——僕はその顔を、間違ひなく見たことがあつた。病院ですれ違つた？ いや、こゝこで合うのはほとんど担当医と家族と、それにボブだけだ。……ボブ、そうだ、あの時に。

『ほら、見てみるよこの記事!』

『……本人、肯定してないんだよね?』

『そうだけどき……』

ああ、そうか。そんなことがあるのか。これが運命の思し召しだろうか。ボブが熱く語っていた掛け声を思い出す。

「……エーオ」

僕がそう眩くと、男は出口の前で歩みを止めた。そして、僕の方へとゆっくり振り向く。間違いない、この顔は見間違いようがない。彼は少し黙った後、口元に笑みを浮かべて、

「エーオ」

と、はつきりそう言った。そして再び歩き始めた彼は、そのまま出口の扉の向こうへと消えた。光の射し込む方へ、歩いていった。それが僕には、どうしても眩しく見えた。(フレディ・マーキュリー……)

あの日、ボブが持って来てくれた記事には、本人はインタビューに答えなかったと書き連ねてあった。それでも、病院にいるということは「そう」なんだろう。疑惑を否定したいなら、そのまま立ち去ればよかったのに。

QUEENが『ライヴ・エイド』に出るといふ噂を聞いたのは、それからすぐの話だつ

た。正直、冗談かと思った。もしフレデイが僕と同じような病に侵されているとしたら、そんなことをしている理由が分からない。歌えるのかとか、病気ならパフォーマンズをできるのかとか、色々な疑問が頭の中で駆け巡った。

そうして僕はライブ当日、もやもやした気分のまま、めったに点けなかったテレビの電源を入れた。音楽に詳しくない僕からすると、名前ぐらいしか知らないアーティスト達が次から次へと出てきて、知らない音楽を演奏して終わっていくだけの番組だった。だから僕は、ただ一組の登場だけを待っていた。もう、時計が午後の七時に差し掛かるところだった。

『女王陛下、QUEEN!』

歓声と共に、上半身タンクトップ姿でその人は現れた。フレデイはピアノの前へと座り、何音か弾くと、そのまま歌い始めた。

『ママ、たった今人を殺したんだ。やつの頭に銃口を突きつけて、引き金を引いただけなのに』

ライブの始まりには似合わない、ゆったりとしたバラードだった。しかし、テレビに映る会場は揺れている。

『ママ、ああ。死ぬのが怖いよ。たまに思うんだ、いつそ生まれてこなければよかったって』

ギターが唸りをあげる。バラードが終わると、フレディは右手を高く上げてピアノを離れた。先程とは打って変わって、軽快な音楽が流れ出す。

『お前はまだまだ終わっちゃいない。まだ誰かが、お前を愛している!』

(……ああ、そうか)

今のフレディを見て、誰が彼のことを悲劇の主人公と言うだろう。ステージを左右に動き回り、世界中の観客へと全身全霊でパフォーマンスをしている。彼は自分が病気で、それを何もかも諦める理由にはしない。テレビからは、僕ですらも聞いたことのある、あのリズムが流れてきた。

『俺たちが、お前らをロックにしてやるよ』

「お前なら、見てくれるんじゃないかって思ったよ」

QUEENの演奏に夢中になっていた僕は、病室に入ってきていた人物に気付かなかった。それは、こここのところ僕のせいで姿を見せなかった人物で。

「……ボブ」

「ぼかんとした顔するなよ。あんまり集中してるから、声かけづらかったただだつて」

「でも、僕は!」

「言うな。俺だつて、配慮足りてなかったしき」

「……ごめん、ありがとう」

QUEENの持ち時間が、彼らのライブの終了を告げようとしていた。

『俺たちは最期まで闘い続ける』

「僕さ、言おうって決めたことがあるんだ」

大歓声を送られるフレディを見ながら、僕はぽつりと言った。僕は彼みたいなスーパースターではないけれど、せめて今からの生き方を変えることぐらいはできるとやらないと思っていたことだ。この気持ちには、蓋をするつもりだった。けれど、もうこの思いは止められないだろう。

「ボブ、僕は、君のことが——」

〈完〉

アンリミテッド・スカイ

「魔法学では四大元素を過剰に使うと、惑星にある生命の循環を滞らせるといふ結論が出ています。そのため風元素を多用する人体浮上の魔法では、一般的な飛行運用は不可能です。しかし——」

原稿を捲る左手の震えを、無理やり抑えつける。気を張ってないと、黒板に書く文字がミミズみたいになってしまいそうだ。壇上の俺に向けられる鋭い視線がよく分かかって、変な汗が流れた。

ここは魔法学会。全国の魔法使いが一堂に会し、各々の研究を発表する場だ。俺の研究テーマは『飛行』。絵本に描かれた、箒で空を飛ぶ魔法は未だに開発されていない。そもそも、魔法が発見されたのがつい二百年前の話だ。火水風土からなる四大精霊の存在が確認され、人々はその力——すなわち四大元素を借りることによって、魔法を使用できるようになった。

それでも単独飛行の技術は遠い未来の話だと言われ、空輸は飼い慣らされた竜を使つて行われていた。しかし彼らも生き物なので、運用は体調に左右される。更に他の動物との衝突を避けるため、上空を飛ばなければならぬ。竜便は短所が多い移動手段だ。

だが、人が単身で飛ぶのなら小回りは効くし、低空飛行で済む。竜便の短所を補える、まさしく夢の移動手段というわけだ。

「つて、そんなことは分かかってんだよな」

俺は立派な王城を後にして、分厚い本と原稿が入った鞆を背負い階段を降りた。俺の右手に握られた箒には、風元素を吸収しやすい素材が編み込まれている。しかし、これ一本では人を浮かせることができない。風元素の使用量を多くしても、結局それは人を風で浮かせているのと同じだ。

「歩くみたいに、もっと気軽に空を飛べるようになんねえかな」

俺はどんよりとした曇り空を見上げた。両親が買ってくれた絵本の主人公が、箒に乗って空を飛んでいたのを思い出す。父が飛行魔法の研究をしていたのもあり、俺も幼いながらに『夢は魔法で空を飛ぶこと』と大きな目標を掲げていた。同級生は皆簡単な研究で去っていったが、俺は夢を諦めていない。

「なあ、あいつ見ろよ」

「うわ、まだ研究続けてるんだ。飽きないねえ」

一向に成果の出ない研究をしている俺は、街の魔法使いからかなり白い目で見られている。普段は家に籠っているからいいものの、いざ外に出るとこうだ。やけに目立つ赤髪も嘲笑の対象になっていている気がする。嫌な視線をローブのフードを深く被ることで

避け、大通りを曲がって暗い路地へ入った。俺の家はこの先にある、少し大きめの一軒家だ。

「あア？」

腑抜けた声を上げたと自分でも思った。自宅の前に置いてある樽に、何故か少女が腰掛けている。声に反応して振り向いた彼女と目が合い、その整った顔立ちに目を奪われた。目映く美しい金髪に、透き通った翡翠色の瞳。薄汚れたワンピースを着ており、身体のところどころに痣や擦り傷があるのが分かった。

「ひっ……」

彼女が俺を見て怯えたような表情を浮かべるので、被っていたフードを脱いだ。

「安心しろ、ここが俺の家ってだけだ。お前、こんなところで何してるんだ？」

「……あの、緑色の髪をした、背の高い人を見かけませんでしたか？」

少女は俺の問いには答えず、質問を投げ返してきた。人捜しにしては汚れ過ぎている気がするが、素直に答える。

「いや、見てねえな。もしかしたら見逃してるかもだが」

「そうですか、よかったです……」

俺の返答に安堵したのか、少女は座っていた樽からふらりと体重を崩した。咄嗟のところ駆け寄って身体を支えたが、気を失ってしまっている。

「おい！ チツ、ボロボロじゃねえか」

助けを呼ぶにも周りに人はいない。しかしこのまま家の前に放っておくのも気が引ける。

「クソつ、仕方ねえな」

俺は少女を背負い、自宅の扉を開けた。ホコリと書物の凝縮された匂いが鼻を抜けていく。ベッドに積まれた本を床に置き、少女を布団の上にそつと寝かせた。改めてよく見れば顔色もよくない上、傷はまるで誰かに虐げられていたかのようなものだった。

「栄養も足りてないが、最優先は治癒魔法か」

水と土元素の力を使い、少女の傷を癒していく。治療箇所が多いほど使用者の負担も大きくなる魔法だが、俺にとっては朝飯前だ。傷が癒える度に少女の肌が陶器のような白さを帯びて、その美しさに目を見張った。

「んっ……っ？」

少女がゆつくりと瞼を開いて意識を取り戻す頃には、傷はすっかり消えていた。俺はそれを見て、緩やかに魔法を止める。精霊と繋いでいた手を離すようなイメージだ。

「よう、お目覚めか」

声のする方を向き、俺とぼつちり視線を合わせた彼女は、勢いよく起き上がるや否や、驚いて目を白黒させた。

「えっ、あ、さっきのお兄さん！ あのを、ここって……」

「俺の家。いきなり倒れたんだよ、お前は」

「ああ……そうでしたか。失礼しました、安心しちゃって」

少女は控えめな笑みを浮かべると、俺にぺこりと頭を下げた。そこで身体の変化に気が付いたのか、もう一度俺に驚いた顔を向ける。忙しいやつだ。

「私の傷、治してくれたんですか？」

「痛々しくて見てられなかつただけだ、勘違いすんな」

「いえ、でも、人にとって治癒魔法って」

「あー、うっせえ。素直にお礼言つてりやいいんだよ。ちびつ子が歳上に氣イ遣つてんじゃねえ」

少女は自分の失言に気が付いたのか、はっと口を押さえた。それからもう一度頭を下げる。

「ありがとうございます、お兄さん。この御恩、絶対に忘れません！」

目をキラキラと輝かせる少女に、お兄さんと呼ばれた俺は名乗ってないことに気が付いた。もちろん彼女の名前も知らない。

「俺の名前はロアだ、お兄さんは撥つたいからやめてくれ。お前の名前は？」

「わ、私の名前ですか……メティと言います」

緊張しているのか、少し堅苦しい少女——メティはそう名乗った。それから落ち着かない様子で俺の部屋をきよるきよると見回すと、ベッドの側に積まれていた本を手にとった。

「ロアさんは、飛行魔法に興味があるんですか？」

「ま、そうだが……てか、研究分野だ」

彼女が開いたのは、飛行魔法の歴史について記されている書物だ。隣の国から取り寄せたために言語が違い、読むには勉強が必要だったのを覚えている。

「飛行魔法の研究！ それなら、相当凄腕の魔法使いなんですね」

メティは花が咲いたような満面の笑みを浮かべる。尊敬の眼差しを向けられたが、自国語を操りつつ、他国語をさらりと読むこいつの方が凄いと思った。俺は首を横に振る。

「いや、研究は順調ってわけじゃねえ。風元素で人体を押し上げるには使用量が多過ぎるし、道具で補助してもそれほど変わらん」

そうだ、まだ尊敬されるようなことは一つも成し遂げていない。優秀な魔法使いだと言われることもあるが、魔法学会の重鎮には研究漬けの老人もいる。俺ではとても敵わない。

「ロアさんは謙虚なんですね。人は地に縛り付けられているようなものなのに、空を飛

ぼうってするだけでも、私は凄いいと思います」

「何事も成し遂げなきや意味がねえんだよ、それだけだ。つーかお前、なんだそれ。地に縛り付けられているのなんのって」

確かに空は飛べないし、水の中でずっと暮らせるわけでもないが、言い方が妙に引つかかる。地面に縛られている、か。俺が考えこもうとすると、メティは慌ててそれを遮った。

「いえその、大したことじゃないんです！ でもこう、新しいアイデアでもない、人間が飛ぶのは難しいのかなあと」

メティの言うことは一理ある。風元素にこだわりすぎるのもよくない。そうとなれば早いところ研究に取り掛かりたいが、今は目先の問題を片付けることにしよう。

「ありがとな、心の片隅に留めておく。それより先にお前のことだ。どうしてあんなにボロボロで人を捜してんだ？」

俺がそう問うと、メティは視線を逸らす。彼女が次に放った言葉は俺の度肝を抜いた。

「え、えつと。言いづらいのですが、実は逃げてきた身で」

「逃げてきただと？ それなら、さっき言ってた緑色の髪の毛の奴っていうのは」

「追っ手です。今もきつと、私のことを捜しているはずですよ」

俺の言葉を引き継いでそう言うのと、メティは弱々しく笑う。先程の笑みとは一転、暗く諦めの色すら見える表情だ。

「俺、もしかして首突っ込んだりしたか？」

口から出たのは、そんな一言だった。違う、他に言うべきことがある。彼女を王都から出すことができれば、彼女は幸せになれるかもしれない。少なくとも逃げてきたという時点で、放っておいていい事柄ではないのは確かだ。

「ご、ごめんなさい。これ以上、迷惑かける前に出ますね。治療、ありがとうございます」

俺はハッと顔を上げる。考えごとをしていて、メティが扉の前まで移動していたのに気が付かなかつた。俺は外に出ようとする彼女の左腕を掴んで、慌てて引き止めた。瘦せ細って骨ばつたその腕の感触で、更に止めなければという気持ちが強くなる。

「待てよ、まだ追ってきている奴が外にいるんだろ？ 今出たって、すぐ捕まるのがオチだ」

「でも、本当にロアさんに迷惑が……」

「そういうのはいいつつってんだろ！ なんだってそんなに怯えてんだよ。重要なのは、お前が逃げたいかどうかだ。違うか？」

俺は顔を近づけ、メティの顔をじつと見つめた。彼女は頬を少し赤く染めて、目を逸

らす。しかし、次の一言はハッキリと言葉にした。

「逃げたい、です」

「……分かった。なら俺は協力する」

「でも」

「どうせ乗りかかった船なんだよ。ここで捨てても後味悪いだろうが」

暫くの沈黙の後、メティは納得したようで小さく頷いた。

「分かりました、よろしくお願ひします」

「じゃあとりあえず休め、明日の早朝に出発する。王都の外まで出たら、馬車でも捕まえ、隣町まで送ってやるよ。知り合いがいるから、そいつから職でも勧めてもらえ」

ここに置くのも考えたが、追っ手がどこにいるか分からない以上、メティの生活は軟禁に近くなってしまう。それは彼女にとつてよくない。

「あの、どうしてそこまでしてくださるんですか？ 私はいさつき会ったばかりの他人なのに」

俺は遠慮するメティを無理矢理ベッドに押し込む。布団の上で横になって、彼女は俺にそんな質問をぶつけてきた。

「放っておけないっていうのもあるが……お前に心から笑って欲しいって思ったんだよ。苦しい表情は似合わねえ、美人だし」

そうだ。せっかくあれだけ花が満開になるような笑顔ができるのだ。メティは俺の返答で、更に顔を赤く染めた。

家の扉が唐突に叩かれたのは、仮眠から覚めた後、メティのための荷造りを終えた時だった。魔法学会の連中だとしても、こんな日が出る前に尋ねてくるのは珍しい。嫌な胸騒ぎがして、俺は忍び足でドアに近づき、覗き穴から外をそつと覗いた。

「……ッ！」

一気に鳥肌が立った。向こうからこちら側は見えていないのに、ドアを見つめる長身の男と視線が合った気がする。射抜くような冷たい目と緑色の髪。メティの言っていた男に間違いない。そう思ったのは、男の格好が――。

「起きろ、出発の時間だ。急ぐぞ」

俺はベッドで穏やかに眠るメティの耳元で囁いた。頭の中で点と点が繋がりあつて、これまでの成り行きに線が引かれる。しかし相手が誰であろうとも、これからやることは一緒だ。

「へ……もう、朝ですか……？」

「違うが、荷造りが終わった。お前も休めたみたいだし、早いとこ出た方がいい」

メティをパニックにしないように、追っ手が扉の前にいることは伏せることにした。幸い家には裏口がある。彼女の髪色は目立つので、俺と同じようにローブを着せて、

フードを被らせた。

「わ、分かりました。それなら、お願いします」

「つと、なるべく静かにな。近所迷惑になる」

俺が人差し指を唇の前で立てると、メティは小さく頷いた。俺は箒を手に取り、裏口の方が王都の出口に近いから、と適当な理由をでっち上げてそちら側に誘導した。

裏口の戸をそつと開け、追っ手がいないことを確認する。外は生暖かい風が吹いていて、嫌な気分を増幅させるようだった。

「よし、っつちだ」

メティの手を引き、裏口から通りに伸びる細い階段を降りていく。夜明け前の街に、二人の足音だけが響いて、その音だけで気付かれてしまうのではないかと、今にも心臓が飛び出しそうだった。

「あの、ロアさん……もしかして、その」

俺の明らかにおかしい様子を見て、背後のメティが声をかけてきた。パニックになっているのはどう考えても俺の方だ。見つからないまま、追いつかれる前に王都から抜け出せればいい。俺は無言で次の角を曲がった。

そこは普段、市場が開かれる場所だ。住宅が王都の関所辺りまでずらりと並んでおり、人々は家の一階で店を営む。早朝になれば人が出てくるが、今は夜の静寂に包まれ

ていた。その道のど真ん中で、最初から俺がここを通るのが分かっていたかのよう、こちらを見つめてくる人影があった。いや、人影という言い方は適さないかもしれない。姿こそ人間のそれだが、頭の上に浮かんだ光る輪、背中から生えた大きな羽で、それが自分と異なる存在だということが分かる。俺の家を訪ねてきたのと同じ種族——天使だ。その姿を見て、メテイが怯えたように俺の陰に隠れる。

「こんばんは、人間。随分驚いた顔をしていますね」

目の前の天使は服装こそ同じだったが、灰色の髪を生やしており、先程の奴とはまた別だ。俺はメテイの話から追っ手が一人だと勝手に思っていた。しかし見つかったしまった以上、悔やんでも仕方がない。俺は平静を装って、口を開く。

「こんな時間に道を塞いでる奴がいたら、誰だつて少しは驚くだろ。それが天使だとしたら、余計にな」

「違いますね。あなたの驚きは、僕が天使だということに起因するものではない——その驚きは、もう過ぎ去っている」

「チツ……天使様には人間の考えなんぞお見通しつてわけか？ 悪いがお前に用はねえ、そこを退け」

俺は天使の男と話しながら、密かに火精霊と繋がる。いざとなつたら、目眩ましに火球の一発でも飛ばせるようにしておかなければならない。

「生憎、僕は用があります。あなたではなく、後ろにいる彼女にですが」
「こいつもお前に用なんかねえよ、そこを退け。俺は先を急ぎたいんだ」

俺の言葉に、男は煩わしそうにため息を吐いた。

「それは、僕の仲間が彼女を捕まえてしまうから、ですか？」

「ロアさんっ！」

背後から悲鳴にも似た俺を呼ぶ声が上がった。すぐさま振り返ると、メティの足が氷漬けになり、その場から動けなくなっている。彼女越しに、緑色の天使が冷たい目でこちらを見つめていた。一体、いつの間そこにいたというのか。

「やだ、これ、動けないっ……！」

俺は人差し指に火を灯し、氷に向けて小さな火球を連射する。だが、一向に溶ける気配がない。俺と天使達を代わる代わる見つめるメティの表情が、流れる涙と共に絶望へと染まっていく。

「アルフ、どうすればいい？」

「手荒な真似はしないように、フェイ。睡眠魔法で十分です」

「ま、待って、私、死にたくなんか」

フェイと呼ばれた天使はメティに近づき、嫌がる彼女のその頭に手をかざす。あれだけ泣いていた彼女が、一瞬にして眠りこけるように目を瞑って静かになった。息を呑む

ような手際の良さだ。魔法を完璧に使いこなしている。俺は口の中が渴くのを感じながら問う。

「お前は……どうしてそいつを狙うんだ」

「その少女は、いわゆるなり損ないでしてね。天使として生まれながらも、羽も輪も持たない、欠陥品です」

呆然とする俺に、灰色の天使——アルフは語る。

「そういった者達は、年に一度行われる祭りの日、生まれ変わりを祈られた後に、神へと捧げられます。想像できないかもしれませんが、天使の社会は全員が飛べることを前提として作られていますから」

「……はは。だから、しょうがねえってか？ そのまま生きるのも苦しいから、生け贄にした方がマシだってことかよ」

「どちらにせよ神の怒りは鎮めなければなりません。我々も若い命を捧げるのは心苦しいと思っています。ですが、これが誰もが幸せになれるやり方なのです」

彼女の保護、感謝します。と、アルフは俺の横を通り過ぎた。ぐつたりとしたメテイの身体を抱え上げると、背中の翼を大きく広げて、空へと飛び立っていく。その姿が、だんだん遠くなっていく。

ふざけるな。何が誰もが幸せになれる、だ？ 俺の目の前にいたそいつは、確かに俺

に助けを求めていた。このままでいいわけがない。どこの神だか知らないが、そのために彼女の笑顔が奪われてたまるか。俺は視線を落とし、右手の箒を握りしめる。今、飛ぶことができれば。ここから飛んで、あの絵本の主人公みたいにな、ヒロインを助けられれば。何かあと一つ、ピースがはまればいい。

——人は地に縛り付けられているようなものなのに。

羽がなくても、天使だからこそメテイはあの言葉が言えた。なら、そこにヒントがあるはず——俺は導かれるように、一つの結論に達した。

「縛り付けたものを解く方法なら、誰でも知ってるじゃねえか。メテイ……俺は夢を叶える。そして、お前を救ってやる！」

俺は風精霊との繋がりを持つと同時に、土精霊との繋がりを極限まで切る。手を離すのではなく、突き飛ばすようなイメージだ。地に縛り付けられていた身体が解放され、感じたことのない浮遊感が内臓を揺らしてくる。俺は箒に跨がり、地面を勢いよく蹴って空へと浮かび上がった。

考えてみれば簡単なことだった。俺は今まで足し算で飛行魔法を解決しようとしてきた。魔法とは精霊の力を使うことだったからだ。引き算——つまり、精霊との関わりを切つて、魔法を補助するという考えは浮かばなかった。世界の誰もがそうだっただろう。でも、もう違う。風が俺のローブをはためかす。空気を切る感覚が、この上なく気

持ちいい。俺は箒の柄を上向きにし、速度を上げて天使との距離を縮めていく。メティを助けるならば、天使が彼らの住処に着くより前にしかチャンスはない。雲を抜け、俺はいよいよ天使に接近する。

「待ちやがれッ！」

俺の声に、天使達が振り向いて驚愕の表情を浮かべる。フェイが火球を放ってきたが、俺は箒の柄を左右に傾けて避けた。

「驚きですね、人間が空を飛ぶとは。聞いたことがない」

「俺が初めて飛んだんだよ、当たり前だ。そいつは渡してもらおうぜ」

「なり損ないのために、どうしてそこまでするのですか？ 彼女にそこまでの価値はない」

「それはお前達が決めることじゃねえんだよ！」

火球が俺の箒をかすめる。このままでは穂先が燃えるのも時間の問題だ。右手を箒の柄から離し、固めた水を連射する。そのいくつかは火球とぶつかり、蒸発した。それでも残った塊がフェイに命中し、その翼を濡らす。途端に彼はバランスを崩し、動きが鈍った。

「へえ、いくら天使様の羽でも、水には弱いんだな」

偶然だったが、これは都合が良い。攻めるなら今だ。水元素との関わりを強めていく

俺に、アルフが問いかけてくる。

「人間、あなたが彼女にそこまでこだわる理由は、何ですか？」

「俺は」

頭の中で、メティの笑顔と楽しげな声がフラッシュバックする。彼女が見せる、花が咲いたような満面の笑み。今にも踊り出してしまいそうな、好奇心のきらめきに満ちた声。

「好きなんだよ、そいつのことが」

アルフは俺の言葉にハツとしたような表情を浮かべる。発動させた水魔法が指からほとぼしり、その翼を貫いた。彼の腕からメティがするりと離れて落ちていくのと、俺の右肩に水をすり抜けた火球が当たるのは、ほとんど同時だった。

「ちっ……メティ！」

彼女が目覚めます心配はない。すぐさま追いかけてようとするフェイを、アルフは右手で制止する。そして彼は、俺の方に優しい視線を送った。

「翼を濡らされて僕達まで帰れなくなっただけは本末転倒です。諦めて上に報告しますよ」

「……責任をお前が持つなら、異論はない」

アルフの言葉に、フェイはため息を吐いて攻撃を止めた。天使達はこちらを見つめながら、更に上空へと遠ざかっていく。

「あいつ、まさか……俺達のために」

そうとなればやることは一つだ。俺は箒の柄を地上に向け、落ちていくメティを追いかける。上昇した時よりも速く、風を切り裂いて急降下していく。俺は落下する彼女と速度を合わせ、箒を脚で挟み込むと、その身体を空中で受け止める。俺はメティに優しく呼びかけた。

「起きろ、いつまで寝てんだ」

昇り始めた朝日が差し込み、俺達二人を照らす。メティはゆっくりと、その目を開いた。

「ロアさん……どうして」

「お前のこと、任されたんだよ」

「助けに来てくれたんですね。空を飛んでまで」

「当たり前だろ、放っておけるか。でも、飛べたのはお前のおかげだ。ありがとな、メティ」

俺の言葉で、メティは満面の笑みを浮かべる。ああ、その顔が見たかったんだ、俺は。「私の方こそ、ありがとうございませす。……あ、やっと名前と呼んでくれましたね！」

王都に空から降りてくる俺達を、騒ぎで目を覚ました人々が驚きと歓喜の眼差しで見つめている。どうやら説明が必要そうだ。メティを抱えたまま、俺はゆっくりと着地し

た。

街中で天使とやりあったことを魔法学会の連中にみっちり絞られた後、俺は彼らに飛行魔法をどうやって成し遂げたのかを簡潔に述べた。準備が整い次第、臨時で集会が開かれるそうだと。王城を出ると、階段の前で待っていたメティが、手を振って近づいてくる。

「あ、お疲れ様です！ 凄いですよ、さつきから街がロアさんの話で持ちきりです」

「飛行に成功したからって、即で手のひら返しやがって」

口ではそう言ったが、悪い気はしない。俺は夢を叶え、それが近いうちに人々の役に立つ。その事実がこの上なく嬉しかった。

「なあ、メティ。行くところがないなら、俺の家に来ないか？」

「ロアさんの、ですか？ 迷惑がかからないなら……」

「そんなこと思わねえよ。丁度助手が欲しかったとこだ。忙しくなるからな」
「なるほど。それなら、私も精一杯お手伝いしますね！」

この笑顔を離さない。そう心に誓って、メティの手をしっかりと握った。

「よし、それじゃあ帰るか」

「ふふ、はいっ！」

これからの未来がどうなるかは分からない。だが、彼女と一緒に進めるといふ確信

が、俺の中にある。無限に広がる青空が、俺達を静かに見つめていた。

インパーフェクション

ぱたん。ゆつくりと、余韻に浸るように本を閉じた。放課後の図書室は夕日が差し込んでいて、少し目を凝らすと宙に舞った埃と塵がきらめいている。運動部の発するよく分からないランニングの掛け声が聞こえてきて、それが近づいてはまた遠ざかる。はう、と息を吐いて、読んだ物語を思い返していく。シリーズの六巻目で、続編は未だに出していない。いざ読み終わってみると、もっとこの世界を見ていたい気分が苛まれる。主人公は愛したヒロインと結ばれて、これから幸せな生活を送るはずなのに、どうしていいところで終わってしまったのだろう。あたしは小説を通学鞆にしまって、どこか満たされない気持ちで席を立った。なるべく音をさせないように、忍び足で図書室の出口へ向かう。カウンターに向かって座っている図書委員の子も静かに本を読んでいて、すぐ横を通り過ぎても気付かないようだった。毎週火曜日にいる委員の女子だったが、あたしは彼女の名字がなんとか谷であることしか知らない。クラスも一緒なのに、目立たない生徒の名前まで覚えてられなかった。

目立たないと言えばあたしもそうだと自虐気味に思う。高校の門を抜けてから、きつとあの子もこちらの名前なんて覚えてないだろうなどと悲しくなる。授業では指名され

た時しか発言せず、休み時間はトイレに引きこもり、放課後は図書室に入り浸って本を読む。そうして誰とも話さずに駅の改札を通り過ぎて、都会の冷たい風と共に滑り込んできた電車に乗る。何回も繰り返してきたルーティンで、今更これを乱すつもりもなかった。あたしは誰とも関わりたくないし、きつとそんなことを考えているやつとは誰も関わりたくないだろう。それで、よかった。

アパートの二〇三号室の鍵をがちやりと回して扉を開ける。冷たい外気に晒されて、耳と鼻が凍りそうなほど痛い。靴を適当に脱ぎ捨てて、ただいまと小声で言ったが、薄暗いリビングから返答はなかった。代わりに聞こえてきたのは、怪獣のいびき。どうせ昼間から飲んだくれて、そのまま床で寝ているのだろう。ちやぶ台の上にはきつと飲みっぱなしにしてある缶ビールが置いてある。確認しなくとも分かる、いつもの光景だ。あたしは馬鹿らしくなって、リビングには入らずにそのまま自室へと向かった。通学靴から本を取り出して、本棚にしまう。本の背表紙にイラストが描いてあって、それを揃えると絵が完成していく仕組みだ。主人公は四巻の背表紙にいて、中心より少しズレている。七巻目があればちょうど真ん中になるのにと、やはり次の話が欲しくなってしまう。物足りなくて、何度も一から六巻を読み返してしまっていた。しかし、作者のブログは六巻目を出した報告の後から沈黙を続けているので、期待するだけ無駄だと心の底では分かっている。

ずっと不快なバックミュージックになっていた、怪獣の鳴き声がびたりと止んだ。あたしは慌てて立ち上がる。リビングに戻ると、赤い顔をした男がそこに寝転がっていた。やはりちゃぶ台の上には、缶ビールが四本転がっている。その四本目は横倒しになっていて、天板にビールの溢れた跡が広がっていた。一缶買うだけでも高いのに、この男はちつとも大切に飲まない。

「オウ、帰ったのかア」

「う、うん。ついさつき。ただいま」

無理やりに笑顔を作り出して、目の前の男の視線に耐える。本の背表紙を長々見ている暇があれば、早いところ着替えておけばよかつたと後悔した。部屋着に着替えたのなら、あたしはこの男から見てただの女の子に過ぎない。けれども制服でいると、そこに分かりやすく女子高校生であるという事実が書き足されてしまう。最悪だ。

「オイ、こつち座れ。……早くッ！」

無理に上げた口角が震えるのを感じた。独りでいるのにはとつとくに慣れたが、これと二人きりにされるのには一生慣れないと断言できる。脚が震えているのがバレませんようにと祈りながら、男の右隣に正座する。男は身体を寄せてきたかと思えば、ぎゅつと抱きついてきた。酒臭さが鼻腔を嫌というほど強烈に刺激して、胃液が込み上げてくるのを堪える。下手なことをして怒らせたなら、余計面倒なことになってしまう。大丈夫

夫、少し耐えればいいだけだ、と毎回自分に言い聞かせている。それでも気持ち悪さは誤魔化せないから、こちらの顔が見えないように抱き返した。男の肩の上にあたしの頭が乗るようにする。男の毛むくじやらの手があたしの身体を撫でていく。それから力任せに押し倒されて、腕を掴まれた。背中がひんやりした硬い床にがつんと当たる。眠っていたくせにかなり酔っ払っている。今日は面倒な日だと思つた。ああもう、制服がシワになる。だから早く着替えておけばよかつたのだ。

「俺はな、お前を見ているとなア、アイツを思い出すんだよ」

あたしの上に馬乗りになつたまま、男は目を潤ませる。そのうちにぼたぼたとその瞳から涙が垂れて、あたしの顔をべたべたと濡らす。

「目つきなんか特にそっくりでよ、お前が歳重ねることに俺はなア！」

男の顔が迫る。乾燥した唇、黄ばんだ歯、剃り残してざらざらとした髭。その全てから逃げたくなくて目を瞑る。男の唇が触れる前に、キツチンの炊飯器からきらきら星が鳴り響いた。それと同時に、押さええられていた腕からふつと重さがなくなる。恐る恐る、ゆつくりと目を見開いて、男があたしの上から退くのを見た。

「チツ……萎えた、さつさと飯作れよ」

「うん、分かつた。すぐできるから」

男の臭いから逃れるように、キツチンへと急ぎ足で向かう。冷蔵庫の中には最低限の

ものしか入っていない。日曜日に買い物に行つて、どうしても足りなかつたら木曜日に買ひ足す。あたしと男の二人分しか作らないから、カレーを作つて三日間ほど誤魔化すこともあつた。

卵をボウルにこんこんと押し当てて、片手で卵を割る。殻の中からたたりと垂れた白身が、男の口内で糸を引いていた唾液と重なつてげんなりした。あたしの頭の中が蝕まれて、思考回路が毒されているみたいだ。そしてそれは、黄身とかき混ぜられた白身のように絡みついて離れない。

男がこんな風におかしくなつたのはいつからだろう。フライパンに広がつていく卵を見ながら思う。男と女はあたしが小学三年生の頃に離婚した。女がひどい浮気をしたとしか知らされていない。それ以上のことは聞くな、聞いたなら殺すからなと言われた。男が過去の写真を全て処分したせいで、その女の顔すらも忘れてしまった。養育費は支払われているけれど、向こう側もあまりにもお金がないのか、大した額ではない。あたしは行きたかつたいい設備の私立を諦めて、公立の高校に嫌々通つている。男は先月仕事でトラブルを起こしてクビになつて、酒の量が異常に増えた。それから次の職を探しているのか、ずっと酒を飲んでるのはかは分らない。何処に就こうが興味はないけれど、こいつと二人で飢え死にするのはさすがに嫌だな。そうなれば、きつと最後まで求められるのだろう。白米の上に薄く広がつた卵をそつと乗せた。そしてケチャツ

プをたくさんかける。チキンライスにする気力も湧かない。これはきつと料理完了未満——オムライスもどきだと思つた。

いただきますの声は小さい。食べている間、ひとつの会話も交わされない。ちゃぶ台の上からはまだ微かにビールの匂いが漂つていて、鳴るのはスプーンと皿が擦れ合うかちやかちやとした音だけ。今日は学校で何があつたかとか、勉強の進みはどうだとか、そんなことは聞かれもしない。この家庭にあるのはあたしと男の歪んだ関係だけだ。一人娘と父親という言葉を当て嵌めるには、あたしたちは不完全すぎる。だからと言つてどうすることもできない。この現状を打破したところで、状況がとびきり好転するようには思えなかつたし、もつと酷くなることだつてあるだろう。あたしは未成年で、まだ生きていく術すら知らないのだ。社会の荒波に放り出されても、こんな少女を拾ってくれる人がいるとは思えない。

窓の外が暗くなつてきた。オムライスもどきを平らげると、おもむろに立ち上がつて電球のスイッチ紐を引く。が、電気が点かない。とうとう電気代も払えなくなつたのかと背中がひやりとしたが、まだ食事中だつた男がこちらを見上げて、

「それ、昨日の夜から調子悪いぞ」

と、小さな声で呟いた。家には替えの蛍光灯なんて気の利いたものはない。だからと言つて居間を真っ暗にしておいたら——ああ、何でも悪い方向に考えてしまう。あたし

は皿をキッチンシンクにぶち込んで、ついたケチャップを洗い流すように水へ浸した。洗い物は後にしよう。

洗面所に向かつて、身嗜みを整える。ぴんと伸ばしてみたけれど、制服のシワは誤魔化せない。冬の制服のスカートが重いのも気になったが、着替えている暇があれば早いところ家を出たかった。鏡に顔を寄せると、目の下にこびり付いて取れない隈が露わになった。あいつに求められる晩もあるせいで、よく眠れない日が多い。男は目付きがあの女に似ているとよく漏らす、こんな目のやつと付き合うのは多分センスがないのだと思う。

「はは、ひどい顔……」

自嘲気味に笑って、独り言を漏らす。化粧品を買うなんて贅沢、できるわけがない。お金が足りないのと、使い切りのものを買うのはどうしても気が引けてしまう。あたしの自室には本ばかりが増えて、それでも満たされない分は図書室に行つてどうにかする。リップクリームすら塗れない唇は、さつき近付けられた男のそれと同じようにかさついていたから、目を逸らすようにマスクを付けた。

「お父さん、あたし、替えの蛍光灯買ってくるから」

居間にそう呼びかけて、玄関で履き散らかしたローファーを脇に退け、中学生の頃に買ったスニーカーに足を通す。制服なのにちぐはぐな格好だ。扉を開けて、この瞳が冬

の外気に晒されたところで、やっと返答がきた。

「オウ、気を付けろよ」

思つてないくせに。

最寄りの電器屋に向かうには、二駅先まで行かなければならない。通学定期券を使つて、電車に乗り込む。こういう時に夕方で済むのはありがたい。朝は混み合っている電車も、都会の方面に向かうからなのか、人はまばらで少なかった。車窓から見えるマンションや家の明かりがきらきらと光っているのを、ぼーつと眺めた。あの一一つ一つに幸せが詰まっている気がする。切れかけの電球じゃ、それに及ばない。電車はゆつくりと止まつて、少し俯きがちになりながら降りた。眩しすぎる光が、あたしの瞳を揺らしてしまふから。

水曜夜の電器屋はそれでも静かな方だった。ゲームコーナーのテレビでは、大きな鎌を持ったキャラクターが派手に敵を倒しながら進む映像が流れている。それを横目で流しながら、電球や蛍光灯を取り扱っているコーナーへと向かう。色とりどりの光が、あたしを出迎えた。まだ誰のものにもなっていない明かり達が、生活の暗闇を埋めるために今か今かと手に取られるのを待っている。あたしはその中の、見慣れた型の品物を手に取った。電気代も節約できるし、いい加減LEDにすればいいのにと、前にそれとなく男に聞いたことがある。すると不機嫌そうに顔を歪められ、あの光の色が落ち着か

ないと突っぱねられてしまった。

「……………めんね」

あたしたちみたいな家の暮らしを照らしたいとは思えない。蛍光灯に同情するなんて変な話だ。でも、あたしが手に取ったせいで、この明かりの未来は決まる。蛍光灯の明かりだけでは、この家庭の暗闇は照らせないのに。

レジ袋が北風に吹かれて、しゃかしゃかと音を立てる。最寄りの駅から家までは歩いて十分ほどだ。時刻は七時半になりそうなところで、もう辺りはすっかり暗い。蛍光灯を替えるためには、スマートフォンライトで照らしながら作業しなければダメだろう。二〇三号室まで帰ってきたあたしは、鍵を回そうとして違和感を覚えた。行きに閉めたはずなのにロックが掛かっていない。あの男が外出中なのだろうか。警戒するようにゆつくりと扉を開けて、忍び足で廊下を進む。明かりのないリビングから、何かの物音がする。まさか、泥棒？ でも、鍵は間違えなく掛けたと言いきれる。いつも気にしているから、そこは間違いない。いや、違う、この物音は。あたしの、聞き覚えのある――

「……………っ！」

居間にいたのは二人の人影だった。手に持っていたレジ袋がするりと手のひらから滑り落ちていく。それがかしゃりと音を立てるのにも構わず、玄関に戻って乱暴にス

ニーカーを履いた。帰ってきたことには気付かれただろう。それでもいい。扉を勢いよく開けて、アパートの廊下を駆け抜ける。冬のスカートは重いから、走るのに向いていない。足をもつれさせながら階段を降りて、どこに向かうわけでもなく走り続けた。分らない。あたしとあいつは、それは歪な関係かもしれないけれど、上手くやっていったはずだ。脳内がぐちゃぐちゃになって、思考が纏まらない。勘違いしてただけだったのか、あいつにとつてあたしってなんなのか。今更新しい女なんか連れ込んで、何のつもりだ。いや、今まで知らなかっただけで、ずっとこうだったのかもしれない。あたしの居場所なんて、学校にも、家にも、この街のどこにもないんだ。涙が堪える間もなく溢れ出てきた。息が上がる。冷たい空気を取り込んだ肺が痛くなって足を止めた。

「最っ低だ。馬鹿だなあ、ほんと」

手の甲で涙を拭う。あいつが父親らしくなくても、あたしのことをきちんと娘として見ていなくても、それでも何らかの形で必要とはしてくれていると思っていた。なのに、現実はこのザマだ。一発、相手側に怒鳴ってやればよかったのかもしれない。今になつて逃げ出したのが無性に悔しくなつて、電柱に握り拳を当てた。でも、どういう風に言えばよかつたのだろう。涙が滴り落ちて、地面のコンクリートに小さな染みを作っていく。

——びいん。

ポケットに入れていたスマートフォンが通知が鳴った。アプリを開くと『もう遅い。帰って来い』とだけ文字が連なっていた。そういえば洗い物をまだしていなかった。怒らせないためにも、早く帰らないと。あたしはどうしようもなく子供で、ここから逃げたところでどうにもならない。

「ていうか、ここ、どこなんだろう」

一心不乱に走ったせいで、自分の現在地が分からなくなってしまった。長いこと住んでいる街だが、必要な時以外に外出をしないので、詳しい道は知らない。スマートフォンの地図アプリを立ち上げたいが、通信制限が怖くて使うのをためらってしまう。充電も二十パーセントしかなく、心もとなかった。買い換えを渋った結果、バッテリーが馬鹿になってしまっている。明るい方へと向かうように、ふらふらとさまよっていたら、駅前の商店街へ出ることができた。いつも進む家の方向とは反対側のアーケードだが、ここからなら帰れるだろう。これからどうしようかと重い足取りで商店街を進むと、本屋のショーウィンドウが目に見え込んできた。そういえばしばらく本屋に入っていなかったなと思い、あたしは扉を押しした。

本の匂いが鼻を擽る。こんなに汚れたあたしでも、本は拒むこともなく静かに出迎えてくれる。だからずっと、図書室や本屋の雰囲気そのものが好きだ。若い世代向けの小説が置いてあるコーナーに足を進めて、そこに飾ってある本に目を奪われた。見慣れた

タイトルの第七巻目がそこに平積みされていた。持っているシリーズの、その続きだ。帯には大きな文字で『最終巻!』と宣伝文句が書かれている。慌てて財布を開いて、今の所持金を確認する。蛍光灯を買った時のお釣りが残っていて、ギリギリ買える金額だった。いつもなら、少しは買うのを躊躇したかもしれない。けれど今は、迷う気持ちすら湧かなかつた。

「六百八十六円です」

七百円をカルトンに置く。あたしの財布は軽くなって、手持ちの重みは念願の続編へと変わった。少し軽くなった足取りのまま、家に帰ることにした。今帰らなければ、夜中までふらふらしてしまう気がしていた。

「……ただいま」

小さく、控えめに言った。廊下に放り出していたはずの蛍光灯はなくなっていて、驚いたことに居間からは光が漏れていた。映る影は一つで、酒の匂いが充満している。ちやぶ台には男が新しく開けたのだろう、缶ビールが二缶転がっている。先程の出来事が悪い夢のように、いつもの風景だった。男は窓の外を見ており、こちらを向こうともしない。

「遅い」

「ごめんなさい、あたし、邪魔するつもりは」

「どうしてくれんだ、なア？ お前のせいで中途半端になったんだよ」

あたしの言葉は遮られた。謝罪の言葉のひとつもない。留守のうちに女を連れ込んで、勝手にやることやっていたクセして、悪びれる様子も見せない。あたしは拳をぐつと固めた。

「そんなこと言ったって……」

「あア？」

「あんたの方が悪いでしょ！ あたしのこと散々めちやくちやにしておいて、それなのに、それなのに——！」

感情が爆発して、大声を張り上げた。目の前の男はこちらが怒りだしたことに驚いているようだった。一度は止まったはずの涙がぼろぼろと溢れ出る。こんな当たり前のことすらもきちんと言えないのが、情けなくってしょうがない。

「なんだお前ツ、親に向かってその口の利き方は！」

「親？ 自分が父親だって言うなら、もつとそれらしく振る舞ってよ！ あんたなんか、あたしが普段何処で何してようと関係ないって思ってるんだよね！！」

「お前、言わせておけばいい気に……！」

勢いよく立ち上がった男に腕を掴まれ、そのまま乱暴に押し倒される。それでも心の奔流は止まらなかった。自分を止めることができなかった。

「違うって言うなら、少しはそういうところ見せてよ！ さっきだって、あたしの帰ってくる時間が全然分らないからあんなことになって——ッ」

馬乗りになられて、平手打ちをされた。目の前の男は顔が真っ赤だ。酔っ払っているわけではない。怒鳴る口からはアルコールの匂いがしないのに、部屋はずっと酒臭い。最近、缶ビールが馬鹿みたいに開けられていたのは、臭いを上書きするためだったんだな、とあたしはくらくらする頭で思った。

「お前は黙ってればいいんだよ！ 一人じゃ何にもできねエクセに、口だけは偉そうにしやがって！」

「それでも、あたしは……あんたのこと、心から父親って呼びたかった」

自分でもびっくりするほどに、冷たい声が喉から出た。あたしの願望が、未来が、希望までもが既に冷えきっていた。目の前の男も、この声の震えに身体の動きを止めた。

「……おやすみ」

あたしは男の重みから抜け出て、鞆を拾う。呆然とする男を後にして、そのまま部屋に引きこもった。

ずっと自分の心を誤魔化していた。歪な関係だけど、不完全だけど、現状を維持していればいいのだと言いつけていた。そうして現実逃避していたら、気付けば世界の崩壊がすぐそこに迫っていた。

「そうだ、本……」

あたしは今いる現状から逃げるように、買った小説を読み始めた。内容は本編の後日譚で、主人公とヒロインが結ばれたその後のストーリーが展開されていた。幸せな物語とは決して言えず、それでも前を向いて生きていく人物達が力強く描かれていた。何度もため息をつきながら、後書きに辿り着く。そこには『この度SNSを始めました』と書いてあった。今にも電源が落ちそうなスマートフォンで作者の名前を検索すると、確かに本人のアカウントが出てきた。ブログをブックマークしていたから、わざわざ名前で検索することがなかったのだ。

「……みんな、変わっていくんだ」

あたしは本を床に置くと、膝を抱えてうずくまった。小説の内容が心へと更に刺さった。それまでの困難な経緯を思えば、主人公とヒロインは結ばれるだけで幸福だったはずだ。それでも満足せずに、次の幸せへと手を伸ばしていく。あの男だって傍から見れば、ようやく過去に踏ん切りを付けて、新しい出会いを探そうとしていると言えなくもない。ここで止まっているのはあたしだけだ。不完全の中でずっと甘えていた。

「変わらなくちゃ、いけないのかな」

現状で止まっていることが許されない、そんな気がした。きつと男は新しい女を連れてくるし、それを拒むことなんてできやしない。求められなくなるのは、嬉しいことだ。

相手をしなくてよくなるのだから。でも、あたしが止まっていたせいで、世界は変わってしまった。勝手に地球は回って、名も知らぬ誰かに終止符を打たれてしまうのだ。あたしはその時、どうすればいいのだろうか。無慈悲な朝日が昇ろうとしていた。